
サイケデリックシンドローム

アマネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイケデリックシンンドローム

【ZPDF】

N1208S

【作者名】

アマネコ

【あらすじ】

十五歳の誕生日をむかえた夜、少女は気づいた時、見知らぬ場所に立っていた。

一部400文字の小説です。

十五歳の誕生日をむかえた夜、気づいた時には見知らぬ場所に立っていた。

おそらくここは列車の中、アレッサは黒いワンピースのスカートの部分を握りながら、不安げに辺りを見回した。

窓の外は真っ暗で、叩き付ける鋭い雨も風で押し流されている。胸ポケットにしまい込んであるポケットライト。でも今はスイッチを入れる必要はない。

首にかけてある黒い紐の先には見覚えの無い鍵。錆び付いていて、重い。

そもそもここはどこなのだろう。なぜ私は列車に乗っている？ 答えの無い質問を繰り返す。

アレッサは家のベッドでしっかりと眠った筈だった。目を閉じる瞬間にイエス様と母に感謝を告げて眠りに落ちた筈だった。その筈なのに、わけの分からぬ場所にいる。不安と焦燥に押し潰され、頭が狂いそう。

途端に揺らぐ視界。喉の辺りまで一気に押し寄せる嘔吐。堪らずボックス席に座り込んだ。朱色のシートは思いの外固い。ため息を吐いた途端に誰かに声をかけられた。

「また新しい乗客か。名前は？」

目の前には一匹のカラス。それがアレッサに話しかけてきた。驚きの表情。当然だ、動物が人の言葉を使ってコミュニケーションを図っているのだから。

「わっ、カラスが喋つていてる」

「カラスが喋つちゃいけないのか。君の世界とは違う、黒の世界に不可能は無い」

世界、黒。カラスの言葉はアレッサには理解出来なくて怯えるばかり。

知らない場所、話すカラス、分からぬ用語に頭はパンク寸前。そうだ、これはきっと夢なんだ。

「理解出来ないって顔をしている。自分で望んだクセに、まあここが何なのかはいずれ分かるよ。僕の名はアリス、よろしくアレッサ」アリスと名乗るカラスは話していないのに、アレッサの名前を突き止めた。驚きの連続に言葉も出なくなっていた。

「随分と驚いた顔をするね。ま、君が元いた白の世界とは大分違うものね」

白の世界。また意味不明な言葉が出てきた。

「黒の世界とか、白の世界とか一体何なの？」

「何つて、ここは黒の世界。君がつこうかベッドで眠っていたのは白の世界。たつたそれだけの違い。黒の世界ではあらゆる不可能が可能になる。所謂完成された世界」

アリスと名乗るカラスは淡々と話してくる。それはおそらくアレッサを落ち着かせる物なのだろうが、逆に不安を煽ってしまっていた。

アレッサは声を上げて頭を抱える。つづくおり、こぼした物は弱音に涙。

「あなたが何を言つているのかわけが分からないよ。お願ひ私を元の場所に返して」

震える声。精一杯の嗚咽をかみ殺して、請い祈る。しかし、アリスは無情にも返答をした。

「無理。君も目的地があるからこの列車に乗つていい。目的地へと向かうしかない。君が望む元の場所には、戻る事は出来ない」

その言葉が胸に突き刺さり、さらにアレッサは声を上げた。

「ところで、目的地は随分と遠いようだけれど、その“切符”では次の駅までしか行けないよ」

黒く艶やかなくちばしでアレッサの鍵を指した。

「“切符”つて、もしかしてこの鍵の事なの?」

アレッサは首から下げる鍵を外してアリスに見せる。
アリスは鍵をくわえると目を細めて、そして返した。

「そうだよ。でもこの切符は次の目的地の“浅瀬の世界”までしか
行けない。“浅瀬の世界”で一度電車を降りて新しい“切符”を手
に入れないと」

アリスはアレッサの肩へと飛び乗り、窓の外を指した。

今まで真っ暗だった外の色はいつの間にか薄いピンク色のモヤが
立ち込める世界へと変わっていた。

モヤの間からは何も見えない。町も建物も何も見えない。

「今見えている場所が君が次に降りて“切符”を探す“浅瀬の世界
”だよ」

「“切符”を探すってどこで、券売機は?」

アリスのありえない言葉にアレッサは聞き返した。券売機も無い
のにどうやって“切符”を手に入れるのだろう。

まさか歩いて“切符”を探すのか。

「そんなんある訳ないよ。ここは君の黒の世界なんだから
表情の無い瞳にアレッサの顔が映る。

間もなくして列車は、アリスの言つ“浅瀬の世界”へと到着した。当たり前だがアナウンスなんて聞こえない。代わりに蒸気を吹く音。アリスはアレッサの肩から離れて乗車口の前まで羽ばたいて行った。

「急いで。“切符”を探すのにあまり時間が無いよ。切符はこの世界の最深部に落ちている。君はその最深部まで向かつて“切符”を取りに行つて、戻つてこないといけない」

アリスに急かされてアレッサも走つて乗車口まで走る。

列車から降りた地面は水浸しだった。今までモヤで霞んで見えていなかつたが、辺り一面水浸しだ。これが“浅瀬の世界”的由来。しかしどしてか、アレッサはそれを不快に感じなかつた。むしろ心地よい。水も肌を切るような冷たさではなく、まるで人肌で温められたかのよう。

脛まで浸かる程度の水の量。膝よりも上で無くなつているスカート丈の長さでは濡れる事は無かつた。

わけの分からぬまま進もうとしたら、列車の中で誰かに呼ばれる。

「待ちなさい。黒の世界で時間を知らない事にはあなたは破滅を導くわ」

振り返った先にはブロンドの髪の女性。漆黒の服と、ウシャンカを被った若い女性がいた。

真っ白な肌に青い瞳、アレッサはその姿に母親のリサを重ね合わせた。

ブロンド髪の女性はポケットから銅の懐中時計を取り出してアレッサに投げ渡す。

「黒の世界の次の列車の出発時間を記した時計よ。時計の針が十二時を指しているけど、それが一周したら列車は発進する、急ぎなさい。それと列車から離れたら絶対に声を出さないよう」「元に」それだけ言うと女性はまた列車の中へと入って行ってしまった。それにしてても声を出さないとはどうこう事なのだろう？

「あ、あの。あなたは？」

ブロンド髪の女性は振り返り一言だけ呟いた。

「シンシア。急ぎなさい、世界が終わる前に」

よく分からぬ言葉。分からぬながらもアレッサは深く頷いて、銅の懐中時計を腰のポケットに入れると“浅瀬の世界”を走り出した。

田の光すら遮るべからこのモヤがかかっていた。アレッサはそのモヤの中を進んで行く。

チャプチャプと水しぶきを上げながら歩いているのに、遮蔽物もないその世界に音は響かずに入った。

ここはどうなのだろう、そもそも自分はなぜこんな事をしているのだろう？　夢、いやいや夢ならこんなにリアルな感触は感じない。水の中に足を入れて濡れる感覚なんてありえない。じゃあ夢じゃないとしたら、やっぱり本当にアリスが言うように“黒の世界”という、私が元いた“白の世界”と違うのだろうか？　分からぬ事だらけに頭を抱える。

アレッサは様々な事を考えた。“黒の世界”の事、アリスの事、シンシアの事、アレッサが田指す目的地の事。

アレッサ自身が知らないといつのこと、それは目的地と呼んで良いのだろうか。

わけの分からぬままその場の流れに流されてきたが、根本的な所を言えばどうしてアレッサは見ず知らずの場所にいるのだろう。こみ上げる不安、家に帰りたい。

色々な考えを巡らせた。自分は寝ている間に誘拐されて、違う国に連れて来られてしまったとか。

いやいや、だったら何でカラスが喋る、何で[ピンク色]のモヤのかかつた広大な浅瀬がある？

いつもそこで考えを止めてしまう。現実にはありえない現象、違う国だとしても人の言葉を喋るなんてありえない。

じゃあやつぱり、アリスが言つよつに全く違う世界なのだろうか？ アレッサは悩んだ。

浅瀬をチャプチャプと歩いているが、何も見えない。ピンク色のモヤが張り巡らせられていて、ほんの少し先しか見えない。だけれどこんなにも歩きにくいのに、不思議と足は疲れていない。なぜだろう？

一步進むごとに沈む足。透明な水とその下の白い砂を巻き込んで心地よい感触に浸かる。水を飲んでみたが真水で、砂と思っていたそれは珊瑚が砕けてサラサラになり、水の下に沈殿していた物だった。

だから田でなくて少しピンクがかつた砂だったのか。なんだか不思議でメルヘンな世界だ。

「アレッサ、あれを見てよ
ずっとアレッサの肩に止まっていたアリスは羽ばたいてアレッサ
を導いた。

モヤの中から姿を現したのは、石灰で出来た身の丈はアレッサの
三倍はあるであろうスプーンの形をした像だった。

何だ、これは？ 意味の分からぬ像。自然が創ったというには
少し無理がある。

スプーンのような像の先のさじの部分にはアレッサの大きさ程度
の白い卵が突き刺さつていて、割れた殻から赤色の水が滴つていた。
赤い水は浅瀬の水と混じり合い、薄く滲む。

不思議な、恐怖と不安を煽る像に目をそらした。

「あ、あそこに誰かいる！」

アリスは今度は向こう岸の方角を指した。

アレッサは狂ったようにアリスの指した方向に走り出す。当然だ、
この“浅瀬の世界”で初めて会えた人なのだから。

モヤから人のシルエットが濃く浮かび上がる」とにアレッ
サは歩みを遅めていた。

シルエットはさつきのスプーンのような像で、像の正体はアレッ
サだったのだから。

2 - 5 (後書き)

> i 2 1 4 9 2 — 7 2 8 <

アレッサの像。黒いワンピースを着た像。石灰で固められた像。私が何でここにいるの？ アレッサの恐怖は臨界点まで迫っていて、尻餅をついて這いずつて後ろに下がった。

しかし後ろに元来た浅瀬は無く、代わりにアレッサの背中に固い物がぶつかつた。

恐る恐る後ろを振り返つてみると、そこにはまたアレッサの像。白いワンピースを着ていて、顔は油性ペンのような物でぐちゃぐちゃに潰されていた。

それはアレッサの限界を越えた瞬間だった。見知らぬ場所に連れてこられて、そこでの恐怖体験。

恐怖のあまりにアレッサは発狂する。シンシアの言いつけを破つて声を出してしまった。

それに気が付いたアリスは随分と慌てている。
「いけない、君が乱れると世界が壊れてしまう！」

途端に、ずるずると溶け出す二つの像。今まで空にかかっていた

ピンク色のモヤは消え失せ、闇が侵食してきた。

ひどい耳なりが世界に響く。アレッサは耳を塞いで、そのまま倒れてしまっていた。

「アレッサ、起きて」

アリスのくちばしに頭をつつかれてアレッサは目を覚ました。起き上がる瞬間に感じる不快な感覚。ねつとりとした粘液が手のひらに付いていた。

思わず飛び退き、辺りを見回した。真つ暗で何も見えない。

アレッサは胸ポケットにライトがある事を思い出して、スイッチを入れる。

「な、何よこい。さつきの“浅瀬の世界”は？」

驚愕。そこは元いた“浅瀬の世界”とは違っていた。

アレッサは個室の中にいて、その床、壁、天井全てがケロイド状にただれてい、黄色い粉のよつたな灰が宙に舞っていた。

ケロイド状の一面にはサイケデリックな模様がひつきりなしに動いている。

入り口と思わしき場所には肉で出来た太い血管が脈打っている。

それにこの腐敗臭、あまりの臭さに嘔吐を催す。

アリスはアレッサをいたわるように体を擦り寄せ、さとすように呟いた。

「アレッサ、ここは“浅瀬の世界”だよ。君が口を開けたから、世界が壊れてしまったんだよ」

「黒の世界の病氣にかかりてしまったんだ。その病氣は列車の外で声を発する事で世界が変わってしまう」

「病氣？ 一体何の？」

「僕たちの間ではサイケデリックシンドロームと呼んでいる。発症者の見る物全てが変わってしまう病氣。床にサイケデリックな紋様が蠢いているだろう？ それが発症したっていう証拠」

確かに床にはサイケデリックな模様が蠢いている。青から赤に変わり、赤から緑に変わる。見ているだけで気持ち悪くなってしまう。「でもこの病氣は一時的な物なんだ。だから心配しなくてもいざれ元通りになる。そんな事より“切符”を探さないと」

アリスの言葉に遂にアレッサが噛みついた。

「そんな事？ そんな事って何よ！ あなたには理解できない、訳の分からぬ場所に連れてこられて、こんな怖い目に遭わされてあなたには分からぬ！」

叫んだ言葉は木靈となることなくケロイド状の壁に咀嚼された。それをじつと聞いていたアリスは冷たくため息を吐いた。

肩で荒い息をしながらアリスの言葉を待つ。全てが耐えられなくなっていた。

当たり前の平和を噛み締めていた筈なのに、いつの間にか非日常へと飛ばされていた。そんな恐怖や不安がたかがカラスに分かるものか。

アリスはため息を吐いた。それは冷たく、アレッサを見下している。

「 そうか、それが君の本心なんだね。この黒の世界を見ても君はそういう感想なんだね。幻滅した、後は勝手にすればいい。君の世界へ戻ろうと必死にもがくのも、黒の世界で破滅するのも君の勝手だ」アレッサの肩から離れると飛び立つてどこかへと行ってしまった。途端に襲われる孤独感。なぜだろう、アリスがいなくなつただけでこんなにも心細い。

だけれどあんな事を言つて喧嘩してしまつた手前、今更アリスを追いかける事も出来ない。

じわりと目頭が熱くなる。寂しさのあまりに出てきた涙は止まる事を知らない。

永遠と流れ続ける嗚咽の中、アレッサはその場につづくまつてしまっていた。

しばらく泣いて、泣き疲れるとアレッサは再び立ち上がった。

アリスは“黒の世界”が壊れてしまったのはアレッサが口を開いて、声を上げてしまったせいだと言った。

たしかにシンシアも忠告を促してくれた。だけれどまさかこんな風になつてしまふなんてアレッサは思いもしなかつた。

予想外の事態にいまだ頭は絡まつて混線状態だが、どうにかして立ち上がる事が出来た。

そして当初の目的である“切符”を取りにいかなければならない。こんな大変な事が起こつたんだ、列車に乗り遅れたらきつともつと大変な事が起こるに決まつている。

アリスは“切符”はこの世界の最深部に落ちていると言つていた事をアレッサは思い出した。なら向かうべき場所はただ一つ、この世界の最深部だ。

「だけれど、どうやつて」

再びアレッサは考え込む。今までアリスが導いてくれていたが、今ここにアリスはいない。どうしようもない不安と焦燥、恐怖に苛まれる。

また頭を抱えて考える。

とりあえず歩かないと。アレッサの思考は迷子そのものだった。

とりあえず歩いていけば何かが見える。

ケロイド状の壁はよく見ると血管のような物が浮き出ていて、脈打っている。

肌色に赤い染みが点々としている。

壁を突き破るように突き出ている鉄骨は肉を巻き込んでいて、気持ち悪い。

それにこの臭い、腐敗臭が辺りに漂い、鼻を摘まずにはいられない。

床に所々に盛り上がっている突起物からは黄色い胞子を噴いている。

これがあの綺麗な“浅瀬の世界”だなんて想像がつかない。

個室から出ると金網で作られた螺旋階段が見えた。まるで建設途中の建物みたいだ。アレッサのポケットライトの光以外は辺りは闇に包まれていて何も見えない。

急な階段に足を取られて転げ落ちてしまいそうだ。

そつならないうつに、慎重に、慎重に。

やがて階段の一番下へと到着した。ケロイド状の壁は無くなつていて、白い壁がアレッサを迎えた。

その奥は、相変わらず暗闇で何も見えない。

白い廊下を抜け、今度は円状の広い空間が現れた。アレッサは直感で理解する。ここが“浅瀬の世界”の最深部なのだと。

今までのグロテスクな建物とは一転して今度は随分と綺麗で落ち着いた空間。

くるぶしまで浸かるくらいの透明な水が敷き詰められていて、空間の真ん中には石灰で創られた大きな木。その木の枝には無数の“鍵”が熟していた。

「これが、最深部。私の求めていた“切符”」

アレッサはあまりの美しさに啞然としていた。天井は見えないが、真上から白い雪、いや珊瑚の灰が降ってきていた。

「ようやくたどり着いたね。まあ本当はここに来れるとは思つていなかつたただれど」

頭上から声。とつさにアレッサは顔を上げた。

そこにはアリスの姿。アレッサの到着を僅かながらも期待していた。

アレッサはアリスに怒りの気持ちよりも、独りではなくなつた事に喜びを感じていた。

「アリス。あなた、私の事を待つっていたのね」
声を張り上げてアレッサは叫んだ。

「感動の再開と行きたい所だけれど、今君が欲しがっているのはこの“切符”だろ?」

アリスは木に成っていた“鍵”をくわえたまま、アレッサの肩に飛び乗った。

“切符”を受け取り、アリスと飛び出会えた余韻に浸る。

「あれは、いい物を見つけた」

するとアリスはまたアレッサの肩から離れて、今度は水の中へと顔を突っ込んでいた。

「わつ、アリス何やつているの?」

近付いてアリスに話しかけると、アリスは顔を上げる。くちばしにはキラキラと光る綺麗な石。

アリスはその石をアレッサに渡すとまた肩に飛び乗った。

「その石はアレッサの物だよ」

「これが、私の?」

「そう。この石はこの世界で祈った君の願いや、理想が結晶した石なんだ。その証拠に、足元を見てごらん」

アリスに言われるままに足を見てみると、アレッサの足にはいつの間にか長靴が履かれていた。

「君はこの“浅瀬の世界”で足が濡れる事を不快に思つより、上手く進めない事に不満を持っていた」

「よくわからないんだけれど、この石は私の願いの結晶で、これを持つてゐる間は私の願いを具現化してくれるってこと？」
訝しげな目でアリスに渡された石を見る。ますます分からぬ、ここは本当にどこなのだろうかと。

いや、それ以前に、

「アリス、あなたはどうしてそんな事を知つてゐるの？ 私に教えてくれるの？」

肩に止まつてゐるアリスを見つめるが、アリスは知らん顔でもと来た道をじつと見ている。

「まあ、それもいざれ分かる事になるよ。君が君の田的でに行こうとこゝの意志があるならね」

どうも訝然としない雰囲気。アリスはきっと私に何かを隠している。アレッサは思った。

渋々その場から立ち去ろうとした瞬間、地面が溶け出した。この感覚はアリスが言つ黒の世界が壊れた時と同じ。

ぐらぐらと揺れる地面。空間が欠片のように砕け、闇が蝕んでいく。端から崩れていく世界にアレッサは驚愕した。

「まづい、もう時間なんだ。アレッサ、走つて逃げよう

アレッサの足下から崩れていいく世界。白が溶け出して黒に変わつていいく。

もともと運動が出来る方ではないが、それでも死力を尽くして走つた。自分の命の危機だと第六感が警告を告げたからだ。

アリスが拾つて受け取つた石をポケットの中に突つ込んで、走る。「何で急に、崩れ出したの？」

走りながら、喘ぐ息づかいでアリスに尋ねる。アリスはアレッサを導くように彼女の前を飛んでいる。

「時間なんだ。『浅瀬の世界』に降りる時、君はシンシアという女性から懐中時計をもらつた。彼女の言葉を思い出せるかい？」

時計の針は十一時を指しているが、それが一周したら列車は発進してしまつゝと。確かに言つていた。

「でも、発進するつていうだけで、世界が崩れるなんて聞いていい！」

「同じ意味だよ！ 黒の世界では列車に乗り遅れたらそのものは一度と先へは進めなくなる。黒の世界で破滅しない唯一の手段は時間内に列車に乗り込んで自分の定めた目的地まで行く事だ」

もと来た螺旋階段を登つていた。その階段はおよそアレッサが登つて来た時よりも遙かに高い。

「列車は間もなく発車時刻だ、世界が崩れるのが速まってきた。急いで！」

アレッサはひたすらに階段を登り続けた。足は既に感覚が消え失せていたが、それでも止まる事が出来ない。

アリスの言う“破滅”が、アレッサにとつて“死”よりも恐ろしいものに感じたからだ。

真っ暗闇の中、足下を照らすポケットライトだけで後は光などどこにも見えない。地響きのような轟音。

落盤のような、浸水のような例えようも無いそれにアレッサは心の底から震え上がる。

そして、ついに一筋の光が見えてきた。それに向かって一心不乱に走つた。

「あと少しだよ、頑張つて！」

アリスの声と共に最後の力を振り絞る。おぼつかない足を噛み千切ろうと、闇が、世界の崩壊が必死になつて襲つてくる。

螺旋階段を登りきると、目の前の列車に乗つた。

大地に、空に黒い亀裂が走つてはがれ落ちて行く。

滝のような汗を流して、アレッサは席にも着かずに床に倒れていた。

その手には“浅瀬の世界”で手に入れた“切符”。世界が崩れる瞬間、無我夢中になつて走つたものだから手のひらに鍵の跡がくつきりと残つていた。

アリスはアレッサの持つていた鍵を取ると席に着いた。
奇妙で奇怪な世界。アレッサはここがもと居た世界とは違うと理解せずにはいられなかつた。

アレッサは色々とアリスに黒の世界について聞きたかつた。何やらアリスも隠し事をしているみたいだ。

そもそもアリスがなぜ自分に執着しているのか理解できない。

「ねえ、アリスはこの世界の道案内人なの？」

まずは思いつく質問から尋ねていく。そうする事で様々な情報が得られるから。

「うーん、道案内人というよりも、住人に近いかも。まあ今回は君のパートナーみたいなものだよ」

やはり意味が分からなかつた。何だ、パートナーって？ この世界が危険なのは分かつたけどパートナーが一々ついているのか？

「この世界が私がもといた世界と違うのは分かったのだけれど、なら私はなぜここに連れてこられたの？」

「それは君が望んだからだろう？　日常の退屈、自殺願望、理由は僕には分からぬけれど君がここにいっているのは君がそれを望んだからだ」

望んだ。その言葉に引っ掛かる。果たしてアレッサ自身はそれを本当に望んだのだろうか？

思い出す、この世界に連れてこられるまでの出来事を。十五歳の誕生日の夜。アレッサには父親がいなかつた。アレッサが生まれる前に病氣で死んだからだ。

その夜は母親のリサと一緒に誕生日を祝つた。平和な日常、たしかにこのままの日常が続けばいいと願つていた筈だ。

何回思い出しても自分がこんな世界を望んだなんてことは無かつた。でもアリスはアレッサが望んだものだと言つ。

「少し、混乱しているみたいだね。まあ無理もないか、ところで君は黒の世界にはまだ慣れていない。こここの世界にも一応ルールはある。今からそれを教えるよ」

「いかに完成された世界と言えど、そこには統率が必要だ。君はこの世界でのルールを知らない。ルールを知らない者はどここの世界でも破滅を導く。だからこれから話をよく聞いてね」

アリスはそう言つているが本当なのだろうか？ そもそもアレッサは自分の意志でここを望んだつもりはないのに、アリスはそうだと言つた。ならアリスが嘘を吐いているに違いない。そもそもアリスはアレッサに隠し事をしているみたいだし。

しかしだからといってこの世界のルールを知らない事にはさつきの“浅瀬の世界”でサイケデリックシンンドロームを起こしたみたいになつてしまふ。それだけは避けないと。

用心深くそれを聞き続ける。

「まずは列車から下車して、列車から離れたら絶対に声を出してはいけない。さつきみたいなサイケデリックシンンドロームを発症するから。後は列車の出発前に必ず列車に戻る、そうしないと先程と同じように世界が崩れて飲み込まれた場合は君が破滅する」

「目的地へと向かうための“切符”は持っている筈なんだ。だけれど君は持っていない、“切符”を持たない者は列車には乗せてもらえない。当然だろう?」

「私の目的地がどこなのは私しか知らない、その目的地の“切符”を持っていないくて、だから“浅瀬の世界”で下車したって事?」アリスが軽快な歩調でアレッサの肩に乗ってくる。どうやらここがお気に入りらしい。

「そういう事。あと黒の世界は完成された世界だから腹も喉も渴かない、トイレにも行かなくていい。便利な世界だろう?」

「レディに向かってトイレなんて失礼なカラスね」頬を膨らませて拗ねる。アリスは笑いながら謝罪の言葉を述べていた。

アレッサは辺りを見回した。それはアレッサに銅の懐中時計を渡したシンシアを探すため。

そしてシンシアの登場を願つた瞬間、彼女が別の車両から姿を現した。

アレッサはほつとした。シンシアはこの世界で会つた初めての人で、母親のリサに似ていたからだ。

シンシアは無言でアレッサの隣に座り、足を組む。凜とした雰囲気は母親のリサそのものだつた。

「あ、あの。さつきはありがとうございました。これ、お返しします」

ポケットから懐中時計を取り出してシンシアに返す。しかしシンシアはそれを受け取らずに代わりに口を開いた。

「いいわ、それはあなたのものよ。あなたにはまだ必要なものでしょう?」

シンシアはアレッサの事情を知つていた。アレッサの目的地までの“切符”をまだ持つていない事を。

シンシアは頭に被つていた黒いクシャンカを脱ぐと、小さくため息を吐いた。

「あの、あなたは一体?」

おずおずと尋ねる。シンシアの鋭い視線がアレッサを捉えると、思わず視線を反らした。

「そうね、なんて説明しようかしら。私の名前はシンシアで、この列車の乗客。ここからさらに北の“氷の世界”を目指していくの」

「“氷の世界”? 一体何のために?」

「そうね、死ぬためかしら?」

衝撃的な言葉が胸にズンと響いた。

「死ぬため？ なんで死ぬためなんかで」

「何でかしら、私がそうしたいから。“氷の世界”は極寒の地と聞くわ、呼吸をしたらまず舌が凍つて、喉、食道、肺が氷漬けにされあつという間に死ぬ。地獄のような痛みらしいわ」

アレッサには理解出来なかつた。シンシアは大人である以上、それ相応の理由があつて死ぬのだろうが、なぜ自分が苦しむ死を選ぶのか、理解が出来なかつたから。

アレッサはシンシアとすっかり話し込んでいて気が付かなかつたが、外の景色がまた黒から変化していた。

背景自体は黒だが、蜘蛛の巣のように張り巡らされた線路。赤い十字架、白い建物。血のような、吐瀉物のような物がいたるところにぶちまけられていた。

「あれが次にあなたが降りる世界。“管の世界”よ、そこでまた“切符”を手に入れる。長い道のりになるけれど、列車から降りたら自分を見失わない事が大切よ」

そう言ってシンシアはアレッサの手を取つた。温もりのある手のひら。

遂に列車が止まり、アレッサとアリスは“管の世界”へと足を踏み出した。

列車の中でシンシアが心配そうに見つめている。

「分かっていると思うけど、列車から離れたら声を出さない。あとこまめに残り時間を確認すること」

その口調はまるで母親のリサそのものだった。アレッサは思わず頬をほころばして小さく頷いた。

「大丈夫ですよ。また列車でお話しましょう?」

アレッサの笑みにつられて、シンシアも笑みを零した。それだけで自然と勇気を貰えた気がした。

振り向き、列車に背を向けて歩き出す。

しばらく歩いて、今まで黙っていたアリスが口を開いた。「アレッサ、シンシアが今まで僕に話しかけなかつた理由が分かるかい?」

列車はもう見えない。仕方なしにアレッサは首を横に振つて答えた。

「おつと、君に声を出させるような質問をしてしまった。シンシアには、いや黒の世界でアレッサ意外の人には、僕は見えていないんだ」

意外な答えに思わずアリスを見た。

「あの時君に話しかけなかつたのは、僕が喋つてアレッサが受け答えをしていたら、シンシアに変な人だと思われてしまうだろ?」
でもそれだつたら、あらかじめその事を言ってほしい。アレッサは不満に思つた。

「あと一つ忠告。君はシンシアと隨分と仲良さそうに喋つていたけれど、あまり彼女を信用しないほうがいい」

その言葉に、アレッサの中で何かが完全に「切れた」。

アリスの首を掴んで、そのまま地面にたたき落とす。今のアレッサには支えが限りなく少ない。その支えの一つであるシンシアを否定するアリスが許せなかつたのだ。

怒りはメラメラと静かに燃える炎のよう。声を出さないようになつて自分を抑える。

「まるで理解できないつて顔をしているね。本当に信用していないのはお前の方だつて言いたいその顔。でもね、僕はアレッサのために言つているんだ。彼女も列車に乗つていたと言つ事は黒の世界の人間だ。黒の世界の人間はみんな嘘つきなんだ」

何が私のためだ、ふざけるな。アリスに対する今までの恨みが爆発した。

そもそも黒の世界の人間だというのなら、アリスだつてそうじやないか。自分の事を棚に上げて何を言つてはいる？

アレッサはアリスの事が信用出来なくなつてはいた。いくらニニドのパートナーだからとは言え、あまりにも失礼な奴だ。

地面に叩き付けたアリスをそのままにして、アレッサは“管の世界”を歩き出した。後ろからミタヨタとアリスが付いてくる。

アレッサは心を落ち着かせるために辺りを見回した。まず目に入つたのは、地面の至る所に敷かれている線路。直線だつたり、曲線だつたり、交差していたり。

次に目に映つたのが地面から生えている無数の赤い十字架。何千、何万とあろうそれは広大な闇に幾重にも広がつていた。

そして最後に目に入つたのが白い建物。これは大きな建物で一つしかない。見た所コンクリートで出来ているが、窓は無く、代わりに建物には等間隔にくぼみが出来ていた。

有無も言わぬ威圧感を醸し出す白い建物に圧倒されるばかり。ここに立ちぬいていても仕方が無い。固唾を呑んで覚悟を決める。

ぞつとあぬ寒氣を振り切るようひたひたかりとした歩調で歩みを進めた。

重々しい扉はコンクリートで出来ていて色は白だとこのこと、なぜか精神的に疲れる。

コンクリートの中の鉄筋が軋み、白い粉を落としながら扉はゆっくりと開く。中は照明が点いているらしく明るい、といつよりも眩しい。白い光が白い空間に反射して目が眩む。

まずは広いロビーのような空間。白のテーブルやソファ、植物は驚く事にコンクリートで出来ていた。妙に固くて冷たい。

中にはやつぱり誰もおらず、受付のカウンターのような場所にも照明が点いているだけで誰もいない。

ふいにアレッサは時計を確認した。時計の針はまだ一分も経過していない。これならまだ余裕がある。

さらに奥に進むと狭い廊下があつた。青色と赤色の管が壁に巻き付いて壁が廊下が捻れている。

この廊下、捻れている。アレッサは心の中で呟いた。青色と赤色の管が巻き付いていて分かりづらいが、角張った長細い空間が調度九十度に捻っていた。

わけが分からるのは今に始まつた事じゃない。そう思いながら捻れた廊下を進んで行く。

青色と赤色の管から心臓の鼓動のよつた脈打つ音が聞こえてくる。これはもしかして血管？

廊下を進んで行くことにアレッサは頭痛に苛まれた。まるで自分の記憶をむりやりこじ開けられるようなそれ。

あまりの痛みにうずくまり辺りを見回すと、驚いた。自分自身が捻れた方向に足がついていたのだ。つまりアレッサは入り口から見たら壁の部分を歩いている。捻れた道に従つただけで壁が地面に、天井が地面に、地面が天井に変化していたのだ。

頭痛を堪えながら廊下の端まで歩く。そこを抜けると筒状の空間の壁に所狭しと扉が設けられてあつた。

どれもが同じ形、色で、それだけで頭がくらくらする。とりあえず端から調べてみないと。

5 - 5 (後書き)

> i 2 1 4 9 3 — 7 2 8 <

扉は一階部分にズラリと並べられてあると思い、更に上を見ると二階部分にも三階部分にもズラリと並べられてある。しかし上へ行くための階段などは無くて、どうやって上の扉に入るのだろうと考えるばかり。

とりあえず一階部分の扉を手当たり次第に開けていった。そのほとんどが壊れていて開かなかつたが、開いた扉が二つあつた。

一つ目の扉はさらに奥に道が続いているようなので、二つ目の扉に入る。

そこには青色と赤色の管がセットで十三本ある部屋だった。そしてそれらの管の先には人間とも動物とも、置物とも生き物とも形容出来ない物が置かれている。

人の形はしているが、モデルは沢山の動物を合わせたみたいで。体はネオンのように発光していてさまざまな色を醸し出していた。その像が左手に持つているのが盾。盾は像の左胸に付いている管を守るように静かに置かれていた。

管は相変わらず脈打っていて、それが血管を意味するのなら像は生き物なのだろうか？

“どうやらこの像は動き出したりはしないみたいだ。

しかし“浅瀬の世界”と言い“管の世界”と言い、何なんだこれは。恐怖、不安が大多数を占める中で何かアレッサの中に迫る物も確かに存在する。

恐怖の中には存在する懐かしさと言えば良いのか。まるで記憶を辿つている感覚。

その部屋から抜けると、もう一つの扉に向けて進んだ。気が付いた事だが、さつきの部屋、像の頭上には赤い十字架が逆さになつて浮いていた。

扉を開けて奥まで続いた廊下。大丈夫、今度は揃れていない。今までの部屋は何となく、人が休み、治療するような場所を連想できたが、ここは違う。

白い檻だ。牢獄がズラリと横に並んでいる。勿論中には誰もいないが、それでも足元から這い上がる恐怖にアレッサはうんざりしていた。

牢獄を調べながら進む。牢は開かない。金属音が鳴るだけで、開く気配は無い。

調べた全ての牢が開かずに半ば諦めかけて最後の牢に手を付けた時、アリスに声をかけられた。

「アレッサ、待つてよ。体がとても痛いんだ、しばらく飛ぶことも出来ない」

ようよろとした歩調で近付いてくるアリス。そのいたいけな姿に罪悪感に襲われる。いくら怒つていたとはいえ、相手を傷つけるなんて大変な事をしてしまつたと。

声は出せないから、代わりに行動で「ごめんね」と。

アリスの体を手で包み込もうとした瞬間、考える。アリスは言った「黒の世界の人間は皆嘘つき」だと。

ならアリスのこの仕草も全部嘘になる。アレッサは迷つた。アリスのその仕草は本物なのかと。

もう頭がおかしくなりそう。痛い、頭が割れそうだ。

「アレッサ、大丈夫?」

だけれど今のアリスは紛れもなくアレッサを心配している。それに答えるように、アレッサは笑つた。

傷付けてしまつたアリスを肩に乗せて、再び進む。その姿はまるで贖罪。

最後の牢は鍵が掛かっておらず、金属の悲鳴と共に埃っぽい臭いがアレッサ達を迎えた。

牢の中はぽつかり穴が空いていて、中は真っ暗だ。

牢屋の中の穴以外、他に行ける場所は無く、思わずアレッサは身を引いてしまった。

「ここはもう覚悟を決めて飛び込むしかないよ」

アリスの言葉にギョッとしてしまう。当然だ。穴は真っ暗で、奥が何も見えないのだから。

それを飛び込めるなんて、やつぱりまともじゃない。

「アレッサが言いたい事はよく分かる。でもね、道はもう一つしか無いんだ。ここでまゝまゝしていたら時間切れになつて君が破滅してしまう。僕は君に破滅してほしくないんだ」

いつもより感情のこもつた説得に違和感を持つ。なぜアリスはこんなにアレッサに固執するのだろうか。

しかしアリスの言つた事も確かだ。このままでは何も解決しない。意を決したアレッサは身を屈めた。アリスの言葉が真実なら元いた世界には戻れない。

そう考えてアレッサは遂に穴に飛び込んだ。

真っ暗闇で何も見えず、引力に引っ張られる体。

アレッサは声を出さないようにするのに必死だった。体が闇に引きずりこまれる。

降りた場所は白い部屋だった。

部屋には水が張つてあり、青と赤の管がドクンドクンと脈打つて
いる。壁の周りにしかれている線路。縦横無尽に駆け巡り、やがて
は繋がっていた。

部屋の中心には人の形をした生き物がいた。青い肌、赤い髪、そ
してぱつこりと孕んだ腹は黄色に輝いていた。

これって、妊婦さん。アレッサは心の中で呟いた。

アリスを見るがどうにも目を閉じたままで何も話そうとはしない。
扉のような物は無く、つまりここに閉じ込められてしまった。

妊婦の顔は笑つてゐるよう見えた。アレッサはここで言葉を發
する事はできないが、それでも妊婦の笑みにつられて近くまで歩み
寄つていた。妊婦もアレッサを快く思つたようで、アレッサの方
へ向かつてくる。

孕んだお腹に冷たい手を当てる。トクン、と。中で何かが動く音
がした。

お腹の中の音に集中して目を閉じていた。目を開くと妊婦の姿は
無く、赤い水たまりが出来上がり、赤いボールが一つ落ちていた。

赤い水たまりの中からは赤いボールが一つ、ぷかぷか浮かんでき
た。

アレッサはギョッとしながらもしげしげとそれを見つめる。
このボールはおそらく、アレッサが妊婦の腹を触ったから出来
た物。ならこのボールは、胎児を表しているんじゃないか？

「アレッサ。ボールを潰して」

アリスの声にアレッサは拒絶した。なぜならアレッサの解釈通り
このボールが胎児だとしたら、アレッサは胎児を殺す事になつてし
まつ。

出来ない。いや、したくない。

「時間が無いんだ。他に道は無いようだし、おそらくこのが“管の
世界”の最深部だ」

最深部だからこのボールに“切符”が入っているから潰せつて？

「冗談じゃない。アレッサは思った。」

アレッサはもうこれ以上自分が傷つきたくなかったのだ。だから
アリスの言葉も拒絶する。

「最深部に他に“切符”がありそうな場所は存在しない。ならこの
ボールの中に入っている筈なんだ」

ボーリングの中に入っている筈なんだ

理屈では分かる。だけどそれを実行する事は出来ない。

頑なに拒否するアレッサ。声に出すまではいたらないが、目に涙を溜め、必死に頭を横に振った。

アリスもいい加減にしてくれといった感じでアレッサにせがむ。

「お願いだよアレッサ。僕は君とまだ離れてたくない、君が破滅する姿を見たくないんだ！」

嫌だいやだと頑なに拒み続け、遂にその場につくまり涙を流してしまった。

それを見たアリスは深い息を吐いて、アレッサの肩から離れていつてしまった。

目を固く瞑つて視界を真っ暗にして、耳を塞いで何も聞こえないようにする。自分は破滅したくないが、それでもあのボールを潰す事は出来ない。

だつてあの中には赤ちゃんが入つていてるから。

その時、ぐしゃっと水っぽい音が耳を塞いでも聞こえた。

恐るおそる見てみると、アリスがアレッサの代わりにボールを潰して中から“切符”を取り出していたのだった。

アリスの真っ黒な羽は赤く染まっていて、それを見た瞬間アレッサの血の気がさつと引き、青ざめた。

「ボールの中に入っていた物だ。『切符』と君の願いがこもった石」アリスは半ば押し付けるようにアレッサに渡した。渡された時に赤い水がアレッサの両手にも付着する。

臭いなんてない、だけどとても気持ち悪い。

右手には“切符”、コンクリートで出来たそれは元は白い筈なのに真っ赤に染まっていた。そして左手にはアレッサの願いがこもった石。

「その石、前の石もそうだけれど碎かれたような跡があるだろ？」「君が持っている一つの石は願いの欠片なんだ。石は君が降りた世界に必ず一つ存在する。それを集めれば、君の願いは永遠となる」自分の願いがこもった不思議な石。手に持っているだけで自分の願いが具現化する。

「この世界で君は孤独を感じた。だからその石は君の願いに答えて孤独や寂しさ、不安を感じさせないようにしてくれる。便利だろ？」

アレッサは両手にあるそれらを見ると、再び部屋の中央の赤い水たまりを見た。

結局あれは一体何だつたのだろう。

アレッサはおもむろに時間を確認した。時計の針はまだ三十分の所を指していた。つまり時間にはまだまだ余裕がある。

「アレッサ、早く列車に戻ろう?」

でもどうやって? さっきの穴から落ちてきて、それ以外道は無い。

そういう疑問が湧き上がり、アリスを見つめた途端アリスは得意気な顔をして後ろの壁を指した。

振り返るとさっきの白い壁は無くなり、壁の中に埋め込まれていた鉄筋もひしやげていて、人一人分入れるであろう隙間が奥まで続いていた。

壁が崩れた音は聞こえなかつた。それにこんな頑丈な壁だ、壊れる筈がないと思っていた。

脈打つ青と赤の管はこの空間で途切れていで、壁の穴には何も無い。

一体何が起きたといつのだ。アレッサは考える。

「君が望んだ事だらう。これは君の世界なんだから」「世界、私の? アリスの言葉にまた困惑を繰り返す。

アレッサは黒の世界では元いた世界とは考え方の次元が違うと無理やり解釈していたのだが、ちがうのだろうか。

気付けば再び列車に戻っていた。“管の世界”での帰りはアレッサはあまり覚えていない。

四方が白い壁に囲まれていた最深部に突如出来た穴。その穴は真っ暗で、ポケットライトの光すら闇に吸い込んだ。

アレッサはその時、闇に不安を覚えた。だからアリスが手渡してくれた石の欠片を手で強く握ると、不思議と不安は消えていた。これが私の願いの石の効果。アレッサは感心した。そうして感心していたら、いつの間にか列車の中に乗り込んでいた。

列車から蒸気を蒸かす音が聞こえた。つまり出発の合図。アレッサとアリスは座席に着くと最後に“管の世界”を見た。

この世界も色々な事があった。嫌な事が大半だったけれど。心の中で愚痴る。

アレッサは果たして自分はいつまでこんな旅を続けなければならないのだろうと不満に思つた。

列車が動き出す。丁度時間になつたのか、“管の世界”が完全に壊れた。

視線を窓から反対側の座席に移した時、目の前に男が立つていた。

アレッサの目の前に佇む男は黒い背広を着ていた。黒いシルクハットもかぶり紳士のようだつた。

しかし明らかにおかしいのは顔の輪郭。菱形の輪郭の中はインクで塗りつぶしたみたいに真っ黒だ。目も鼻も口も見えない。

「お嬢さん、この席は空いていますか？」

ぞつとする声でアレッサしか座つていない座席でわざわざ許可を取つた。アレッサは生理的にこの男が苦手だつた。

アリスはこの男が来てから黙つたままだ。おそらくアレッサと会話をしていく怪しまれるのを危惧したからだろつ。

「あ、どうぞ」

カラカラの喉でよつやくひねり出した言葉。それを聞くと男は満足そうに席に座つた。

「いや、危ない所でした。寸でのところでの列車に乗り込めた」男は豪快に笑う。しかしどいつもその笑いは冷たいようになしかアレッサには聞こえなかつた。

「あの。あなたは“管の世界”から來た人なんですか？」

恐るおそる尋ねる。すると男はシルクハットを脱いで深々とお辞儀をした。

「その通り。“管の世界”からやつてきました」

「あの、何で？」

アレッサの質問に対して男はクスリと笑うとポケットから写真を取り出した。

その写真には一つのシルエット。その内の一には男の姿が写し出されていた。

そしてもう一つのシルエットは、

「妻です。色々とわけあって離ればなれになってしまい、会いに行くのです」

男は“花の世界”が目的地だと言つた。

アレッサの質問が終わると今度は男が質問を始めた。

「お嬢さんはお若いですが、お嬢さんは何でここに？」

「それが分からぬんです。気が付いたらここにいた。明確な目的地もないまま、ずっと列車に乗つている」

目的地が分からぬのに結末など見えてくるのだろうか？ アレッサは甚だ疑問だった。

それを聞いた男は残念そうに呟いた。

「そうですか、まだ若いのに。残念でならない」

残念？ 他人から見てアレッサは残念なのだろうか。

今までアレッサは黒の世界は異世界だと思っていたが違うのだろうか。

男が手を差し出してくる。一瞬意味が分からなかつた。

「私はダイヤと申します。お嬢さんの名前は？」

それが握手だと分かつた途端、アレッサは慌てて差し出してきた手を握る。

「アレッサです。よろしくお願いします」

「アレッサ。いい名前だ、よろしく」

堅い握手を交わすと、別車両の扉が開いた。

そこからは制服を着た男とシンシア。アレッサはシンシアと再び会えた事に安堵した。

制服を着た男、車掌と思わしき男は顔に荒い包帯を巻き付けていた。肌を露出させている部分など無い。

車掌はダイヤに向かつて手を差し出した。“切符”を確認したいのだろう。

ダイヤはポケットから万年筆のような長細い物を取り出すと車掌に見せた。

「アレッサ、ダイヤつて男の“切符”と君の“切符”的形状は大分違うけど、君は車掌に“鍵の切符”を見せれば良いんだよ」

今まで黙つっていたアリスが静かにアレッサに声を掛けてきた。そう言えば他の人にアリスの姿は見えないのだけ?

車掌に“切符”を見せるアレッサ達は次の車両へと案内された。アレッサとアリス、ダイヤとシンシアは揃つて次の車両へと向かうと、さつきまでいた車両の連結部分に頭が花で出来た小人がいた。

「アリス、あれは何をやつているの？」

「ダイヤとシンシアに聞こえないようにアレッサは尋ねた。

「あれは車両を外しているんだ。黒の世界ではいらなくなつた車両は捨てる仕組みなんだ。さつきまで僕達がいた車両は“浅瀬の世界”から“管の世界”までの物だからね」

アリスの言つた通りに確かに車両が壊れて行く。闇に取り込まれ、赤いヒビが割れ始めると割れ目から木の根や花が咲き乱れる。花は一瞬で枯れ、代わりに出たのが目玉。

目玉も潰れると車両全体がペイズリー模様に色付けされ、間もなく砕けた。

「世界の破滅に取り込まれた物は万物問わずあの末路を辿るとされている。アレッサだつて、ああはなりたくないだろう？」

アリスの言葉にアレッサは頷くしかなかつた。

座席に座る時、既にシンシアとダイヤが先に座っていた。

「アレッサ。こっちへ」

シンシアの手招きに従い近くまで歩くアレッサ。アレッサはシンシアの事をすっかり気に入っていた。

彼女の手には小さなポーチがあった。肩にかける為のベルトも付けられていて、色は黒だ。

「これあげる。あなたのポケット中、色々と詰まっているでしょう？」

確かにそうだった。首にかけている一つの鍵、胸ポケットにはワイヤー。その他に腹部にあるポケットには例の石が一枚片。これでは走る時に落としてしまうかもしれない。

「ありがとうございます」

ポーチを受け取ると早速一枚片の石をしまった。ポケットライトはとつさの時に光を点けられなければ意味がないし、鍵も今の所邪魔にはなっていない。

アレッサはますますシンシアの事が好きになつた。これだけ自分に親切してくれる女性は母親のリサ以外にいなかつたからだ。

アレッサはシンシアの隣に座つた。その姿はまるで親子だ。

「あれを見てアレッサ。新しい世界だ」
ダイヤの声にアレッサは窓を見た。

今度は一面木々に囲まれた広大な空間。一見した所、ただの森のようだが。

「あれは“樹海の世界”ね。深い霧が立ち込めてるわ」
今度はシンシアが呟いた。確かに森全体に深い霧が立ち込めていて、時々その霧が人の顔に見えてしまった。

また列車の外へと出て、理解出来ない世界で“切符”を手に入れる。アレッサは堪らなく憂鬱になつた。

アリスは黙つたまま外を見つめている。アレッサとアリスの関係は“管の世界”から何だかギクシャクしていた。
確かに怒つたのはアレッサの方だが、アリスと仲直りがしたいとも思つていた。

“樹海の世界を一望していたら、不安に思つ事があり思わず口にした。

「あの、黒の世界には猛獸とか危険な生き物はいるんですか？」
その質問にシンシアとダイヤは互いに顔を見合させて困った表情を浮かべた。

「さあ？ 一つ言えるのは、君がそう思えば出でてしまつ

列車は止まり蒸氣を吐いた。はそれを合図に列車から降りる。

降りてまず始めに思った事は地面だった。“樹海の世界”というまでだから、自然で満たされていると思つていたら地面は土ではなく、黒くて冷たくて硬い石のような物で出来ていた。

しかも地面には幾何学模様が描かれていて、アレッサから見て右斜め下へと段々とスクロールしていく。

妙な不安定感が襲つた。思わずシンシアから貰つたポーチに入れてあつた一枚片目の願いの石を取り出して強く握る。

激しかつた心臓の鼓動が徐々に落ち着いていくのが分かった。ポケットに突っ込んである懐中時計を取り出すと時間を確認する。時間はまだ世界に降り立つて間もなく、充分にある。

アレッサはそそくさと歩き出した。なるべくこの世界には長居したくないと思つたからだ。

いつも履き慣れている黒いサンダルもこの時だけは「コツコツ」と硬い音を立てながら進んで行つた。

深い闇と霧。黒と白が入り混じる不気味な世界。

「アリス。“管の世界”であなたと喧嘩した時の事、まだ怒ってる？」

列車からさほど離れていないから、まだアリスと話す事は可能だ。アリスはさつきからずっと黙つたままアレッサの肩に乗つていて、それが何となく嫌だつた。

「怒る？ 何で？」

だがアリスはケロッとした態度で質問を質問で返す。

「あなたを傷付けてしまったから。その、痛かつたのに置いて行つてしまつたから」

段々と声が小さくなる。アレッサは思い出しだけで罪悪感で一杯になつた。

いくら不安で仕方なかつたとは言え、パートナーを傷付けるなんてありえない。

「ああ、別にあの事はいいよ。僕だつて君にしか分からぬ事情があつたのに僕の言葉を無理やり押し付けようとした」

あんなに酷い事をして、アリスはケラケラと笑つてくれて、逆にアレッサの罪悪感を深めた。

「でもねアレッサ。僕は君が破滅する所は見たくない。だからこの先何があつてもこの旅を止めるなんて言つてほしくないんだ」

「なんだかアリスにそんな事を言わると恥ずかしいよ。ありがとう」

アリスを撫でて微笑む。表情の無いアリスも、その時だけは笑つているように見えた。

“樹海の世界”を歩き出す。地面には幾何学模様が横に動いていた。

森の中に入ると急に濃霧がアレッサの前に立ち込める。その霧は何だか臭いがついているように思えて、息を止めてしまう。

森の中はより一層不気味で、その原因は辺りに生えている木だった。木には顔が掘られていて、模様だと思つたそれは急に泣き出しそうな顔をする。

声を出さないだけまだマシだが、それでも恐怖を煽る事には変わりない。

薄暗闇の中、人魂のように姿を現したり消えたりの白くて長細い物体が遠くでチラチラと見えていた。

アレッサは近付いて見てみると、それはロープでロープの先端には目玉がずっとアレッサを見ている。

濃霧はさらに濃くなり、息が詰まりそうだった。

アレッサの足元には木の根が茂つていて、非常に歩きにくい。

こままだと足を木の根で切つてしまひ。

そう思つたアレッサはポーチの中から“浅瀬の世界”で拾つた願いの石を取り出して強く握る。

“浅瀬の世界”では握つた途端に黒いロングブーツが足を包んでいてくれた。その効力はどうやら“樹海の世界”でも有効なようで、足には黒いロングブーツが履かれていた。

「どうだい、君の願いの石は？ 取つておいて正解だつただろ？」「アレッサの肩に止まっているアリスはまるで自分が正しかつたと言わんばかりに話している。

アレッサもそれを疎ましく思つ事はなく、素直に頷いた。

森の奥に進んで行くごとに生い茂つていく草木、深くなる霧。ますます歩きにくく、視界が悪くなる。

すると今度はアレッサの場所から僅かに離れた場所で幾つかの光がぼうっと灯つていてのが分かつた。

ゆらゆらと揺れる光はおそらく火。

アレッサの予想は当たつていて、火がある場所には木々が一本も存在していなかつた。

代わりにあつたのが沢山の蠟燭。

蠅燭、蠅燭、蠅燭。見渡す限り蠅燭ばかりが立ち並んでいる。

蠅燭からは様々な色の火が灯っていた。赤、青、黄、緑、白、黒。不気味な事は今始まつた事ではないが、その中でも印象に残つた蠅燭が一本あつた。

紫色の太くて大きい蠅燭。その蠅燭からはぼうつと冷たい火が灯つてゐる。温かみが感じない真つ青な火、むしろ凍傷を起こしてしまいそうな程冷たい。

辺りを見回してもこの蠅燭よりも大きい蠅燭は見当たらない。

あまり蠅燭をいじらない方が良い。そう思いながらもアレッサは思わずその蠅燭の火を消そうと息を大きく吸つていた。

「待つてアレッサ。あまり黒の世界の物に對して自分の介入をいれちゃいけないよ。君が世界に取り込まれてしまふかも知れない」アリスが必死になつて抑制してくれたが、ここから先はどうにも何も無いような気がしてならなかつた。

思い切つて蠅燭の火を息で吹き消した。

大きな蠅燭の火が消える。それと共に周りの火が一気に消えた。

辺りの火が消え、たちまち森の中は暗闇に取り込まれた。それと共に聞こえる焼けただれた悲鳴。蠟燭の火を消した途端、四方八方から悲痛な叫び。

「あつ！」

その悲鳴に耐えられず、アレッサは思わず声を出してしまった。すると足元がズルズルと沈んで行く。まるで底無し沼に両足を突っ込んでしまったかのよう。

「危ない！ 木の根でも何でもいい、早く掴んで！」

アリスの声。しかしアレッサの周りに掴む物は無く、そのまま胸のあたりまで地面に沈んで行ってしまった。

「アレッサ！」

アリスの声が遠退いて行く。気持ちの悪い感覚が、全身を包む。やがてアレッサの意識は、途絶えた。

アレッサが再び目を覚ました時は暗闇の中だった。

“樹海の世界”で思わず声を上げてしまつて、急に地面が溶けて沈んでしまつた。

アレッサはしまつたと思った。あれだけ声は上げないようになつてていたのに、また声を上げてしまつた。

「アリス、いるの？」

呼んでみたが、返事は無い。

辺りは暗闇に包まれていた。アレッサはとりあえず胸ポケットにあるライトのスイッチを入れる。

眩い光と共に浮かび上がってきたのは、白と黒のモノクロタイルで囲まれた人一人がやっと通れるくらいの長細い廊下。

確かにアレッサは声を上げてしまつた。だからまたあの気持ち悪い世界が広がる事は多少覚悟していたのだが、今度は逆にあまりにも整頓された世界。無駄な物が何も無い。

それがアレッサを逆に不安に煽つてしまつ。ただでさえ、今の彼女にはアリスがいないのだから。

アレッサがアリスの事を呼んでみたが、返事はなく、だからここは“樹海の世界”ではないか、アリスとはぐれてしまつたのではないかと仮定した。

狭い空間に息が詰まる感覚。頭がぐらぐらと揺れて、酔うような感覚。

それでもアレッサは歩き出した。ここがどういう場所なのかを突き止めるため。

長い廊下の終点と思つていた場所はさらに道が分岐されていて、アレッサは困惑した。

迷宮だった。

右を見ても、左を見ても、前も後ろも全て十字路。アレッサは慌てふためいた。こんな大迷宮に迷い込んでしまい、どうやって“樹海の世界”に戻つてくるのかと。

ポケットに入れたままの懐中時計を取り出すと、時間を確認した。時間はあと一十五分程度しかない。

慌てた。慌てれば慌てる程に迷宮に飲み込まれていく事も忘れるくらい慌てた。

田にうつすら涙を浮かべながら、弱々しい声でアリスを呼び続ける。

モノクロタイルの迷宮は永遠に続いていて、階段を登つたと思えば、また変わり映えのしない十字路。

頭がおかしくなつて発狂しそうになつた。時間はあと五分と無い。そうして分からぬながらも先を歩いた時、ようやく十字路ではない場所がアレッサの田の前に広がつた。

モノクロタイルの空間には変わりないが、その空間の広さは尋常

ではない。

床には電柱が何本も生えていて、その電柱の天辺は僅かに赤い。それにさつきまでは聞こえてこなかつた音が響いている。

これは、心臓の鼓動？ 血液が流動する音が世界に響いていた。
まるで生物の体内みたいだ。

アレッサはモノクロタイルの広い空間を歩いた。電柱はランダムに地面から生えていて、しかしその先に赤い跡が付いていたのは皆共通だった。

背筋に這い上がる悪寒を殺して、一歩歩くたびに響き渡るだだつ広い空間。

一見したところ、モノクロタイルと電柱以外は何も無い。本当にこんな空間にいる意味はあるのだろうか？

時間が迫っている。焦ったアレッサは走って走って走り続けた。でも見えてくるのは電柱だけで。

その瞬間、足が動く昨日を停止した。アレッサの意思に反して機能が停止したのだ。

何かが割れる音。恐るおそる足元を見ると、足から太ももにかけて赤黒い亀裂が走る。

激痛がアレッサの体中に走り、刃物で筋肉纖維を引き裂かれる感覚とはきっとこんなものなのだろうと瞬時に理解した。

みるみるうちに変化していく自分の姿にたまらずアレッサは叫んだ。体が崩れる。

両足に赤黒いヒビが入った。皮膚と筋肉がバックリと裂け、足の中から白い骨が覗く。しかしその骨にもまたヒビが入り始めた。まるで赤錆だ。体中に走る亀裂は段々とアレッサを駆逐していき、遂にそれは掌まで上ってきた。

熱い。体の中から炎に炙られているようにアレッサは感じた。熱くて痛くて怖い。

その時、体に入った亀裂から赤、青、黄色の花が咲き始めた。花はクルクルと回りながら咲いて、瞬く間に枯れしていく。

次に水が出てきた。赤くない、黒い水が壊れた水道管のようにアレッサの体中から噴いて出る。途端にアレッサは立つ事が出来なくなつてその場に倒れた。

水っぽい音。倒れた瞬間に両足と左腕がもげる。もげた手足からは薦と有刺鉄線が生えてきて見ているだけで気持ち悪い。

やがてアレッサの視界は万華鏡のように重なり、ぼやけて正確には見えなくなつた。

最後に、アレッサの体中の亀裂の中から無数の目が見え、間もなくアレッサは「碎けて消えた」。

激痛に苛まれてアレッサは飛び起きた。

気付くとそこは真っ白い世界だつた。真っ白い大理石の床には水が張つてあつて、僅かにモヤが立ち込めている。

白く、太い柱が左右に等間隔に立てられていて、その一番奥には巨大な壁。その壁の真ん中には理解出来ない文字で縁を囲んだ大きな穴が広がつていた。しかしその穴は暗闇に包まれている事はなく、むしろ白い。

アレッサは自分の体を確認した。五体満足、それどころか体に亀裂一本も入つていない。

ならさつきの感覚は一体？ 確かにアレッサは黒の世界で「破滅」したはずだ。なのに存在している。

体中の激痛はすっかり引き、無意識の内に巨大な穴に向かつて歩き出していた。

ちゃっしちゃっしと小さな水の音を立たせながら。広い空間に波紋が広がる。

アレッサが左右の柱を追い越すたびに柱に取り付けてある燭台から白い火が灯る。

そして遂に大きな穴の手前にまで近づいた。穴にそつと手を置いた時、後ろから人の声がした。

後ろを振り返る。白い世界に唯一の黒。いやアレッサは黒いワンピースを着ているから「唯一」ではないのだろう。

反対側には同じように巨大な壁に巨大な穴。違うのは穴の奥が暗闇に染まっていた。

その穴から人が一人出てきた。距離が離れ過ぎていて男女の判断が出来ない。でも一足歩行だから人だと思った。

「そつちへ行くと戻っちゃうよ？」

人は小さい声で呟いたが、それは残響してアレッサの耳に届いた。

「戻る、戻るつてもしかして私が元いた世界に？」

大してアレッサは大きな声で向こう側の人尋ねた。

向こう側の人は僅かに首を動かした。

アレッサは元々目が良いから、その小さな反応も逃す事はない。

なんだって。この穴を通れば自分は元の世界に戻れて、黒の世界から抜け出せる事が出来るのか。アレッサは急に心が軽くなつた。

これで狂気じみた世界から、離れる事ができる。

そんな風に思っていたのを向こう側の人に悟られたのか、アレッサに話しかけてきた。

「あなたには今までの世界が狂氣じみた物しか見えなかつたの」心の中を見透かされた不安。そんな不安を拭おうと、ポーチの中から石の欠片を取り出して強く握る。

が、それでも不安は拭われる事は無かつた。

「無駄だよ。ここは黒と白の世界の狭間の境界だから、効果が得られる訳ない。それにあなたは、私と」

向こう側の人があや葉を言い切る前にアレッサは穴の中へ飛び込んでいた。話を聞いてはいけない気がしたから。

真っ白い穴の中。飛び込んだ瞬間にアレッサは落ちた。

穴の中を落ちていくごとに周りの白色は強くなつていいく。穴の外で何がが蠢いている音が聞こえた。

まるで蛇のような蛭のような這いする音。アレッサは途端に恐怖した。果たしてこの穴は本当に元いた世界に繋がっているのかと。そもそもアリスは言つていた「黒の世界から抜け出す事は出来ない」とも。

だけれどアリスは黒の世界の住人で、黒の世界の住人は全員嘘吐きだとも言つた。

頭が、混乱する。

頬を優しく撫でる朝日、小鳥のさえずり。

胸から下に伝う心地良い温度に抱かれながらアレッサは天井を仰いだ。

見覚えのある板張りの天井。眠れない夜は天体観測のように天井のシミを見たものだつた。

小さく開いた窓辺から生の匂いと共にそよ風が流れ込んでくる。

つまりここはアレッサの部屋で、アレッサはさつきまで眠り続けていた。

「夢、だつた？」

両手を視界の真ん中にかざして呟く。今までの謎の世界の冒険は全部、夢。

妙にリアルで、どつと疲れていた。しかし夢だつたという安堵に溺れて思い切りため息を吐いた。

確かにあれは夢だつたのだろう。夢じやないと説明がつかなかつた部分が数多く存在した。

そうでないと自信自信が「破滅」したのに、どうして今生きていく。そこまで考えてふと疑問に思つた。

「私、あの夢の事を随分とはっきりと覚えている」

夢とは田覚めと共にどんどん忘れていく物だが、アレッサははっきりと覚えていた。

何だか不思議な感覚。

冷たい廊下に足を這わせ辺りを見回した。

寸分違わぬアレッサの家。肌に伝わる床の冷たさも、そよ風も、水のせせらぎも夢だとは思えずについた。

「本当に、帰ってきたんだ」

言葉に出して改めて感じる現実。

廊下を出て、リビングへ。リビングからダイニングへ。

小さく古びた木の扉を開けると軋む音がした。扉の向こうから光が漏れ、ダイニングで寛いでいたのは。

「ママ！」

アレッサの母親、リサを見た途端アレッサはリサに飛び付いた。突然の事に驚いたリサだが、優しくアレッサを包み込むと尋ねた。

「どうしたのアレッサ、何かあったの？」

優しく心地良い聲音は紛れもなく母親のリサそのものだった。

今まで不安に駆られてきた心が融解して、涙が溢れる。

「少し怖い夢を見ていたの。訳の分からぬ世界をずっと歩いていた夢。私の隣にはアリストというカラスが付いていて」

そこまで話すとアレッサは顔を上げた。

リサは首を傾げて表情を固くしてアレッサを見ていた。

「アリスって誰なの？」

アレッサの肩に手を置いて諭すように話すリサ。

「え？ だからアリスは私の夢で会ったカラスで」

笑顔を絶やさないまま、声も明るいままアレッサは再びリサに教える。

しかしリサはそれを遮るような自分から話を始めた。

「そうよね。あなたにアリスなんてお友達いないものね。それにしても変な夢ね」

自分を納得させる言葉は、なぜか早く、しかもアレッサの言葉に耳を傾けたくないといった感じだった。

案の定、リサは「牧場の手伝いをするから」と語ってアレッサの前からいなくなってしまった。

アレッサの心境は決然としないままでいた。夢の事、アリスの事を話した途端に、僅かではあるがリサの表情が固くなっていた。

なぜ、夢の事でリサが心配する必要がある？ アレッサは疑問に思つた。

しかしその疑問も今は後回しで、リサの言つたようにアレッサも牧場で手伝いをしなければならなかつた。今日は学校も休みで、だから一日中家の手伝いだ。

家は牧場を経営している。そうは言つてもこの牧場はリサの実家で、リサは夫が死んでしまつてから戻つてきたのだが。

実家に祖父や祖母はおらず、皆アレッサが生まれる前に死んでいつてしまつた。だからこの牧場は実質リサ一人で経営しているような物なのだ。

勿論、町から雇つてきた若者も牧場の仕事をまつとうしてくれているが、それでも女手一つでここまで牧場を活気づかせるのには多大な時間を要した。

リサは今まで大変な苦労をしてきた。その苦労をほんの少しでも労う事が出来ればとアレッサは物心付いた頃から牧場の手伝いをしてきた。

いつまでもここに立つていても仕方がない。そう思い、ダイニングテーブルに置いてあるアレッサの朝食を取ると、すぐに外へと向かつていた。

古めかしい木製の扉を開けると一面に広がる緑の丘。牧場の香りが一気に押し寄せて心地よい。

肺一杯にその空気を溜め込むとアレッサはリサがいつも仕事をしている小屋まで走つて行った。

夜。牧場の仕事をすっかり終えたアレッサとリサは自宅へと戻り団欒を共に過ごしていた。

ストーブの火がメラメラと燃え、パチパチと音を立てる。厚手の毛布をかぶりながら椅子で窓いでいたアレッサにリサが話しかけてきた。

「アレッサ、あなたが話した今朝の夢の事なのだけれど」
微睡みに引き込まれそうになつていたアレッサはリサの声で覚醒する。

また夢の話を聞かれた事に僅かな疑問が浮かびあがる。
「アリスって名前、どこかで聞いたから夢に出てきたの？」それとも、突然出てきた名前？」

なぜそんな事を聞く必要がある？ ますます疑問が湧き上がってきた。

もしかして、黒の世界やアリスは夢ではなかつたのだろうか。
「ママ。なんでその事を聞くの？ 今日はなんだかおかしいよ、ずっと表情が怖い」

牧場の手伝いをしている時も思つていた事だ。

それを指摘されたリサは慌てて作り笑いをした。
「私、トイレに行つてくるね」

不審がりながらアレッサはその場を離れた。

アレッサはリサの寝室に忍び込んでいた。トイレに行くと偽つて寝室に向かっていたのだ。

リサの先ほどの言動はあまりにもおかしかい。違和感が強すぎる。

「ママはきっと何かを隠している」

眩きながらアレッサは鏡台の中の小物入れの棚を漁っていた。本当はこの棚はアレッサが手を出してはいけないものだった。今までのリサの思い出があるから。

背徳感に包まれながらもアレッサは自分の好奇心には勝てずにいた。

棚を開けるたびに出てくるリサの過去の姿。アレッサの父親の写真だつたり、昔のアルバム、それに指輪。

出てくる思い出の品を見つける度に心が痛み虚しくなる。自分はどうしてこんな事をしているのかと。

そうして一番下の小物入れを見る。そこには小さな桐の箱。黒ずんでいて、少し汚い。

恐るおそるその箱を開けると、そこには綿に包まれた二つの黒い石のような物があつた。

「これって、へその緒だよね？」

自問。しかしそれは紛れもなくへその緒だった。

桐の箱の中にはその緒があった。それ事態はなんの変哲もない物なのだが。

どうして、へその緒が二つある？

アレッサの疑問は尽きなかつた。なぜならアレッサは生まれた時

から一人っ子で、姉弟なんていなかつたからだ。

箱の裏には年月が彫られていて、それは紛れもなくアレッサが生まれた年、月日。

一つがアレッサのへその緒だとして、じゃあもう一つは？

わけが分からぬ。果たしてこれが誰の物であるのか。

アレッサは桐の箱をそつと小物入れへしますと、今までのリサの

思い出の品も寸分違わずに小物入れの中に入れた。

おそらく見てはいけない物を見てしまつた。アレッサは直感で悟つた。

だからこの事実をリサに気付かれてはいけない。そう危惧した。

覚束ない足取りで、寝室を出て行く。

リサがアリスの事を執拗に聞いてきたり、小物入れの中には二つのはその緒。謎を解明する為の行動がさらに謎を生んで頭が混乱してしまつた。

謎がさらに謎を生む。頭が痛い。

ベッドに入るとすぐに睡魔が襲ってきた。頭を木槌で殴られていたような鈍痛と睡眠欲という曖昧な感覚に苛まれながら眠りの沼に沈んでいった。

気付いた時は赤い空間にいた。

細長くその奥は先が見えない程果てしなく、床、壁、天井全てに金網が張り巡らされていた。

側面に取り付けられた巨大なプロペラは轟音を上げながら回っている。

赤い世界はまるで血のようだった。照らされた肌まで真っ赤に染まり、見るもの全でが赤だった。

「ここは、もしかして」

ようやく紡いだ言葉はそんな物だった。そうして目の前に映る光景に絶望していた。

今、立っている場所は紛れもなく黒の世界だった。しかもこの異常をきした世界、間違いなくアレッサが“樹海の世界”で思わず声を出してしまった瞬間の続きだった。

錆び付いた金網に生物の皮膚が腐った物がこびり付いていて、歩くたびに不快な足音が立つ。

それにこの腐臭。膿の中に投げ込まれたかのような不快感。間違いなかった。

必死に冷静を保とうとしたが無理だった。血の臭いと腐った膿の臭いが混じり合つて一呼吸する度に嘔吐感に苛まれる。

アレッサは後ろを振り返つてみた。そこに道はなく、あるのは凹んだ赤錆だらけのシャッター。シャッターにはアレッサの理解出来ない漢数字で「十三」と書かれていた。

進む道は一つしかない。黒の世界に入つてしまつたという事は既に時間制限が設けられているはずだ。もたもたしていられない。

ワンピースのポケットの中にある懐中時計を開くと、時間はアレッサが“樹海の世界”に飲まれた時と変わらず十分を指したままだつた。秒針もまだ動いている気配がない。

ここはまだ黒の世界じゃないという事だった。しかし白の世界でもない。所謂狭間の世界。

アレッサは走り出した。アレッサについて来るように元来た道にシャッターが下ろされて行く。

「十一」、「十一」、「十」。漢数字の読めないアレッサにそれが何かのカウントだという事は分かった。

アレッサは走り続けた。その度に真後ろでシャッターが下りる音。プロペラの回転音はさらに激しさを増し、いつの間にか床の金網以外の壁、天井はプロペラが取り付けられていた。

金網とプロペラの隙間から見える赤い世界。金網で囲まれた通路の外はまるで製鉄所の高炉のように重厚で背の高い機械がいくつも並んでいた。

足の裏の不快な感覚にはすっかり慣れた。それだけアレッサが長い時間、この狭い一本道を走ってきた事となる。

走りつづけると壁と天井のプロペラは無くなり、代わりに姿を表したのが赤いペンキで書かれた漢字。アレッサは漢字を理解していなかつたので、壁に何と書かれているのか分からぬ。

漢字の羅列は最初は両側の壁に一列しか書かれていなかつたが、進んで行くごとに列は増え、最終的に螺旋状に書かれ始めていた。奥を進んで行くと濃くなる赤い霧。遂に視界の全てが赤にまみれた時、アレッサの体はふつと軽くなつて、床の落とし穴に落ちた。

落ちた先はダクトのような細く狭く暗い道で、アレッサはその中を転がりながら落ちて行った。

真つ暗闇、少女の叫び声が木霊する。

そしてダクトの終点。ダクトから転がり落ちると地面に叩き付けられた。

肺が押しつぶされるようなか感覺に呼吸も出来ず、咳をするしかない。

胸が電気ショックを受けたみたいに痺れている。

咳を交えながらもようやく呼吸が可能になると、アレッサは立ち上がつて辺りを見回す。

しかし途端に今アレッサがどこにいるのかを把握出来てしまい嫌悪した。

アレッサは今糞の中にいた。動物の糞ではない、人糞だ。この悪臭、喉の直前まで胃の中の物が上ってきた。

涙目になりながらさらに周りを見た。幸い赤い霧はすっかり晴れていて、暗闇が立ち込めるだけになっていた。

ポケットライトを点ける。そして懐中時計を確認。すると時計の秒針は進み出していく、既に一分ほど時間が経過していた。つまり狭間の世界から黒の世界に出てきたという事。

ここが黒の世界ならばアリスもきっとどこかにいるはず。アレッサがダクトの中で叫んでも世界に変化が無かつた事からこれはもうおそらくサイケデリックシンдро́мという黒の世界特有の病気にかかってしまったのだろう。

「アリス！ ここにいる？」

声を張り上げてアリスを呼んでみた。しかし返答は虚しく、返つてくるのは世界に響く心臓の鼓動のような音だけ。

しばらくアリスを呼んでみたが、返答がない事を理解するとしぶしぶ人糞の中を歩き出した。

シンシアから貰つたポーチの中から“浅瀬の世界”で手に入れたアレッサ願いの欠片を握りしめると、次の瞬間には黒いロングブーツを履いていて、これならば人糞の中を歩いても変な病気にかかる事はないと安心できた。

不快な感触と音を立てながらアレッサは人糞の道を進んで行く。幸いな事に人糞の量はそれほど多くなく、せいぜい脛より下に埋まる程度だった。

アレッサはキヨロキヨロと辺りを見ながら進んで行く。

しばらく人糞の道を歩いていると、ある事に気が付いた。
蠅燭だった。蠅燭の不気味な光が、まるでアレッサを導いている
かのように辺りを僅かに照らしていたのだった。

人糞の中から生えている木。しかしそく見ると木目などどこにも
無く、実はその木は人の腕で固めて木のよう見せている物だった。
もしかしたら木だと思って近付いた者を取り込んで、この腕の像
の一部にしてしまう罠なのかもしない。そう思ったアレッサはな
るべく腕の像には寄り付かないようにしようとした。

木々と思わしき腕の像があつたり、蠅燭がある事からこには“樹
海の世界”で間違いなさそうだ。ならばアリスも絶対にビックにい
る。

そう思ひと少しだけ希望が見えたような気がした。

その時、ふと脳裏をかすめた。今までその事など何も考へていな
かつたのに、急に思ひ出した事。
アレッサが白の世界に戻った時に見つけたへその緒の事だった。
どうして今それを思い出したのかは分からぬ。

黒ずんだへその緒。それはアレッサにとつて他人事とは思えなかつた。当然だ、同じ桐の箱に一つのへその緒が入つていたのだから。つまりアレッサに姉弟がいたという明確な証拠。しかしアレッサは一人っ子だ。

もう一人の姉弟と生き別れになつたのか、それとも。

そう言えばなぜここでへその緒の事を思い出したのだろうか？

アリスの言葉を思い出す。「君が望んだから君はこの世界にいる」と。

へその緒と黒の世界、何か関係でもあるのだろうか？ 考えても分からぬし、考えたくもない。

アレッサは再び歩き出した。黒の世界では時間を無駄にする事はできない。

歩き続けるとしめ縄のような物がアリスの両脇から見え始めた。道は間違えていいみたいだが、いつまで経つてもアリスと出会う機会が無い。いい加減不安になつてきた。

人糞の道はだんだんと浅くなつてきて、既に踝が埋まる程度の深さまで変わつていた。

この最悪な場所を抜けられると思つと、思わず安堵した。

人糞が完全に無くなつた地面はなぜか床を叩く音がした。
地面に這つサイケ調の印はまるで毒々しい色をした虫のようだつた。

元の“樹海の世界”でも地面に幾何学模様が描かれていたが、これは違う。まるで床が意思をもつたかのようだ。

人糞の道は無くなつたが、人の腕を固めた木は等間隔に生えていて、並木道になつていて。しめ縄の数も、蠅燭の数もどんどんと増え、それは最深部に近づいている印だつた。

歩く。音を立てながら。

ふと横を見ると並木道の奥に「ゴミが積み上がる」ゴミ山があつた。ゴミ山には不燃物ばかり。車とか冷蔵庫とか列車の車両とか。世界の破滅に飲まれた物はここに集められるのだろうか？ そんな事を考えながらも足は進んで行く。

しばらく歩き、すると壁にぶつかった。大きな壁、しかし視覚化出来ない。

厚いガラスの壁がアレッサの前に立ちふさがつてゐるみたいで、アレッサはもどかしく感じた。
壁を這つて歩いても入り口はどこにもない。

アレッサは懐中時計を開いて時間を確認した。まだ時刻は三十分を経過しているだけで、余裕はある。しかしもたもたしてはいられずに入った。

アレッサは見えない壁を手探りで探しながら分かつた事があった。この見えない壁は円形になつていて、その壁の内側の物に触れさせないようにするためだった。

これだけ厳重に守られている場所。最深部の可能性が非常に高い。

アレッサは地面に落ちていた握り拳程度の石を拾い上げると、壁に向かつて思い切り投げつけた。

鈍い音を立てながら石は跳ね返り、地面に転がる。壁には傷一つ付いておらず、これはガラスのような脆い材質では無い事を理解。

おそらくアレッサはこの壁を一周してきた。しかし入り口と思わしき場所はどこにもなく途方に暮れてしまっていた。

壁に全身をもたれかけ、考えた。果たしてこの壁の内側にどうやって入ろうかと。

足をぶらぶらとさせて考えに耽ついたら、アレッサはハッとしてある事に気が付いた。

「この壁、下が無い」

全面見えない壁で塞がれていると思った場所は意外にも踝から下辺りに見えない壁は張られていなかつた。

手を突っ込んでどちらんと突き抜ける。これならば地面を掘れば通り抜けられるかもしれない。

アレツサは固い音の鳴る地面に向かつて手を刺した。地面は存外柔らかく、するすると腕が埋まつて行く。

そのまま両手を使って地面を掘り返し続けた。地面はいつまで掘つても固くなる事はなく、遂にアレツサが通れるくらいまで土を掘り返した。

そこからはアレツサは這いずっと壁の内側へと入つて行つた。まづはポーチなどの這いする際に邪魔になる物を壁の内側に投げ入れてから、次は体を壁の内側までねじめる。

壁の内側へとすんなりと入る事が出来た。体中に付いた泥を払つて、ポーチや“切符”、ポケットライトを拾い上げると立ち上がる。今気が付いた事だが、この世界に雨が降り出している。体に叩きつけるそれは、とても冷たく感じる。

アレッサの体は冷えていた。黒の世界では水に浸かっても冷たいと感じた事が無かつたので随分と不思議な感覚に思えてならなかつた。

人糞に塗れたり、泥に塗れたり、雨に打たれたりとアレッサの体は窮乏していた。何よりもまた黒の世界に戻つてしまつた事が一番ショックだつた。

小さく震える唇を噛み締めて、震える足取りで先へ進む。そこに“樹海の世界”の最深部がある事を信じて。

しばらく歩くと、大きな墓石が見えてきた。

墓石には謎の紋様が刻まれていて、その形は以前アレッサが黒の世界から白の世界へ出て行く時の穴の縁の紋様とそつくりだつた。他に道と思える場所は無い。恐れながらも墓石を押す。すると墓石はあつという間に崩れて無くなつてしまつた。石が既に朽ち果てていたのだろうか。

墓の中には苔むした階段。ムカデやゴキブリのよつな虫が階段で這つていた。

階段に足を下ろす。気持ちの悪い音と共に足を下ろした階段の部分の苔は腐つっていた。

階段を下りる。永遠とも思える段差にアレッサは世界の裏側まで繋がっているのではないのかと不安に思つた。

下ることに高まる湿気。闇はさらに深くなり、なにやらブザーの音まで聞こえてきた。

牢獄の扉を開ける時のブザーのような音。それはアレッサにさうなる不安を与えた。

とつさにポーチから“管の世界”で拾つた願いの欠片を握る。激しく脈打つていた心臓が段々と落ち着いていく。

再びアレッサは階段を下りた。このままここに居続けてもやがては時間がきて、世界が破滅してしまうから。

どのくらい時間が掛かったのだろうか。ほんの十数分程度がアレッサには数時間に感じられた。

遂に世界の最深部と思わしき場所へと到達した。目の前に見えるのは赤錆に侵食された鉄の扉。重々しい雰囲気がかきたてられる。意を決してアレッサはドアノブに手をかけ、ざらつくそれをこじ開けた。

入った先は座敷牢。アレッサの先には畳に覆われた牢獄が立ちふさがつっていた。

座敷牢。それは紛れもない座敷牢だった。薄暗く、闇を浴びた畳が艶やかに輝いていた。

中を進むと木でできた太い檻。その一本を掘むと思い切り引つ張つた。

存外、木の檻は頑丈でアレッサの力ではビクともしない。荒い息を吐きながらアレッサは牢屋の中を見た。

牢の中にある木で出来たテーブルの上に、木の鍵。あれが、“切符”。

手を伸ばすが明らかに届かない。どうにかあの“切符”を手に入れる事が出来ないかとアレッサは考える。

しかしいくら考えても良い案が出てくる事はなく、時間だけが浪費されていった。

「アレッサ？ アレッサだよね」

その時、檻の中から聞き覚えのある声。まさか。

「アリス？ そこにいるの？」

闇から這い出てきた姿はアリス。黒い翼は闇と同化していく見分けが付きにくい。

アレッサはアリスと再び会えた事に喜び満ちていた。今まで一人でここまで歩いてきたのだから、余計にそれを感じる。しかしアリスは顔を俯かせ、声を籠もらせていた。

「アレッサ。これを」

アリスがくちばしにくわえて来たのは“切符”だった。アレッサはそれを受け取ると礼を言ひ。

「ありがとうアリス。さあ、早くここから出よ！」

手を差し伸べてアリスを導こうと誘うが、アリスは俯いたまま。一体どうしたと言つのだ。

このままだと時間切れになつて、アリスもアレッサも破滅してしまつ。

するとアリスは顔を上げて、アレッサに優しく話しかけた。

「アレッサよく聞いて。どうやら君と僕は、ここでお別れみたいだ」
聞き慣れない言葉にアレッサは耳を疑つた。

「え、それってどういう事？」

「君は僕とはあまりに違い過ぎた。君はこの世界から帰りたがる、
僕はこの世界にずっと居続けたいと思ひ。真逆の考えがずっと一緒にいられる訳が無い」

「何言つているのよ！ 今までずっと一緒に冒険してきたじゃない
！ 確かにわた」

「この座敷牢。アレッサにはこれが何に見える？」

アレッサの言葉を遮るように、アリスは座敷牢を見上げて尋ねた。

「これは、牢屋でしょう?」

何を当たり前の事をと訝しげにアリスを見た。
しかしアリスは上を見上げたまま、動かない。

「違うよ。これは君と僕の距離だ。とても近いけれど、絶対に交わ
れない」

何を言っている? アリスは私に破滅してほしくないから付いて
来ているのではないか? アレッサは思った。

いつまでも上を仰いだままのアリス。時間が、もう五分とない。

「僕は前にここは“君の黒の世界”だと言った。だけれど、ここは

“僕の黒の世界”もあるんだ」

「アリス、あなた一体何を言っているの?」

「君が理解するにはまだ早い。でもいざれ理解する、その時に僕は
恐らく存在しないだろうけれどね」

突然、世界が崩壊を迎えた。黒い空間に赤いビビが入り、中から
ドロドロした黒い液体が漏れる。

「アリス早くこっちに来てよ!」

手を差し伸べるがアリスは首を横に振つて手を掴む気配は無い。

「君が“樹海の世界”に取り込まれた時に僕もここに連れて来られ
たんだ」

「闇に飲み込まれた感覚。アレッサなら分かるだろ？　快感で不快だ。君と僕の世界はこんなにも醜い」

「アリス今はそんな事を言つていい場合じゃないの。早くこっちに来て」

泣きそうなくらい切ない声を絞り出してアレッサは懇願した。だがアリスはまたも首を振るだけ。

自然とアレッサの頬に涙が伝つた。

「もう、ここからは出られないみたいなんだ。でも安心して、僕はここで破滅してしまうけれど、いつだって君の側に居続ける事は出来るから」

途端にアレッサの足元がドロリと溶けた。アレッサの体がどんどん飲まれていく。

これは“樹海の世界”に飲まれた時と同じ感覚。

「それまで、ちょっと待つていてね」

その時見たアリスの姿は、全身の黒翼に赤い亀裂を走らせて破滅する寸前だった。

何かが切れる、音がした。

気が付いた時には電車の座席に横たわっていた。車内には誰もおらず、薄暗い光が辺りに立ち込めるばかり。妙な虚無感に、アレッサは嗚咽を漏らした。

目を赤く腫らして、立ち上がった。そこにおよそアリスの気配は無く、掌には木製の鍵だけ握られていた。

いや、違う？ もう片方の掌に硬い感触。手を開くとそこには見えの無い石の欠片。

「これはもしかして」

肩に提げてあるポーチの中を確認した。ポーチには願いの欠片が二つ入っている。

そして掌にはもう一つの欠片。もしかして、“樹海の世界”で拾つてきたのだろうか。

しかしアレッサは石を拾つた覚えは無かつた。だとすれば、アリスとの別れの際で、何かしらの方法でアリスがアレッサに気付かれないように欠片を忍ばせたに違いない。

三つ目の願いの欠片は大理石のように表面がツルツルとしていて、手触りが良い。

その欠片をアレッサは強く握つた。すると片方の手にはスコップ。おそらく“樹海の世界”の最深部に到達する前に穴を掘つて進んだ事からこのスコップが出てきたのだろう。アレッサはそう解釈した。

掌に収まる小さな願いの欠片。あまりにも切ない。

抑揚の無い涙は滴り落ちる。心臓の鼓動が早くなり、喉元が焼けるくらいに熱い。痛い。

いつの間にかアレッサは泣いていた。アリスがいなくなってしまったという事実を否応無しに理解してしまったからだ。

隣の車両からシンシアが現れる。その顔はアレッサを哀れに思っているが、実際には何が起きていたのか分からぬ筈だ。だつてシンシア達にはアリスが見えていないから。

「アレッサ」

優しく語りかけるシンシア。アレッサの肩に手を掛けて不明な原因を慰める。

今はただシンシアの慰めが優しく思えた。だからアレッサは、シンシアの体にしがみつき、その体を震わせる。涙の水溜まりが出来上がっていた。

状況をいまいち理解出来ていらないシンシア。それでもアレッサを受け止める彼女はあまりにも優しい。

落ち着いてきたのか、嗚咽をかみ殺してアレッサは顔を上げる。

「ありがとう、ざいま。う大丈夫」

小刻みに震える唇は大丈夫じゃない証拠だ。それでも立ち上がる。

嗚咽が止み、アレッサの体に残るのは不規則に小刻みに揺れる列車の振動だけだった。

アリスを無くした事でアレッサの中は空っぽになっていた。肉親が死んだなんて甘い感覚ではない、自分の体の一部をもがれたような痛み、虚無感。

アレッサの隣に座っているシンシアはずっとアレッサをなだめているばかり。その仕草があまりにも母親のリサに似ているから、また涙が出てきてしまつ。

シンシアにはアリスは見えていない。だからアレッサが泣く理由が分からぬ。

しかしシンシアの優しさは同情からくる物ではない事がアレッサは分かつていた。

涙も枯渇し、心すらも窮乏した頃に一つの疑問が湧き上がってきた。

アリスはアレッサ以外の人には姿が見えないと言つていたが、なぜだつたのだろうか。

例えばダイヤは黒の世界の住人でシンシアもおそらくそう。お互いの姿は見えているが、アリスの姿は見えない。

アリスが黒の世界にとつて例外だつたという事だつたのだろうか？

まだ分からぬ事はある。列車の外では言葉を発してはいけない。サイケデリックシンドロームという黒の世界特有の病気を患つてしまふから。見る物全てがおぞましく変化してしまつ病気だ。だがあれは見る物全てが変わるといつよりも、世界そのものが変わつてしまふに近い。

そういうえばアリスはアレッサに「君の黒の世界」と言つていた。私の黒の世界。つまり黒の世界は他にも複数あるのだろうか？ アレッサは悩む。

アリスは列車の外でも絶えずアレッサに話しかけてきた。黒の世界にいるといふ事はアリスは常にサイケデリックシンドロームを発症していた事になる。

しかしアリスの様子にはそれが見とれなかつた。
どういう事なのだろう？

今まで「自分がいた世界とは違う」と無理やり解釈してきたが、それでも解釈しきれない歪みが生まれてしまつた。

「アレッサ。考え中悪いけれど、そろそろ次の世界に到着するよ」ダイヤがいつの間にか反対側の席に座つていた。

「次の世界？」

それを自ら口にしてようやく意味を噛みしめた。

アレッサは今まで色々な世界へと降りて“切符”を取つてきたのだ。

アリスがいなくなつた今、全てがどうでもよくなつていた。ただ、それでもこの旅を続ける自分がいる。

アリスの「旅を止めないでほしい」という願いを果たすために。たつた一本の約束という糸はあまりにも細く、揺らいでいる。

アレッサは窓の外を見た。

砂、砂、砂。辺り一面に砂丘が出来上がり、その色は多彩だ。

珍しく空に青色が付いている。白い雲も、作り物のような太陽も空に昇っている。

つまり、砂漠。しかし砂漠の中には鉄塔や高層ビルなどの人工物が埋まっている。

これも、私の黒の世界だから出来上がった物なのだろうか。次第に頭がおかしくなる。

わけの分からぬ出来事の連続で精神的に疲れきっていた。アレッサの心は崩壊寸前。

「“砂漠の世界”ね。アレッサ、大丈夫？」
シンシアの心配が、今はたまらなく煩わしい。

気が付いた時には列車から降りていた。

生氣の抜けた表情で辺りの砂漠を一望する。

白、ピンク、黄色、青の砂。多彩な砂はソフトクリームのようだ。

夏みたいに照りつける太陽。子どもが描いた落書きのような太陽がひたすらに光を発していた。

暑くないのに、額から吹き出る汗を拭いながら重い一步を踏み出した。

砂とは思えない足音が鳴る。砂といつよりもブリキを叩いた時の音。

謎。不安。虚無。憂鬱。アレッサの頭の中でそればかりが巡りめぐっていた。

砂丘の中に埋まっている石像は間違いなく自由の女神。なぜ自由の女神が砂の中に埋まっているのか、今は氣にする事もできないが。植物などの自然物はまったく無く、代わりに地面から顔を出しているのは人工物ばかり。

砂ばかりの世界だ。一歩進む度に自分の軌跡が作られる。

そうしてしばらく歩き続けると、目の前にピラミッドのような物が見えてきた。

しかし、何かが違う。ピラミッドが逆になっていたのだ。

ピラミッドの頂点の部分がなぜか地面に突き刺さつていて、普段地面に埋まっている部分が空を向いている。

しかもピラミッドの周りには王の墓と思わしきギラギラした華美な棺の数々が破壊された状態でピラミッドの周りに突き刺さっている。

そして空を向いている部分には奴隸と思わしき人間が飲み食いを交わしている。

アレッサは思わずピラミッドに近付いてぐるりと周りを一周した。入り口と思わしき場所はどこにも無く、柵のようない王の棺が等間隔に突き刺さっている。

ピラミッドを見終わり後ろを向くと、今度は足の無いスフィンクスが一体。しかもスフィンクスの目の部分には黒いモザイクが掛かっていてその素顔を見る事が出来ない。

なぜか額に青筋を浮かべてブルブル震えているスフィンクス。シールだった。

視線を上から下に戻すとアレッサが今いる場所は沢山の人工物が埋まっている場所だった。

ここを掘つたら何かこの世界の手がかりが出てくるかもしねり。

他に特に印象に残るような場所はない。広大な砂原と、人工物が転々としているだけだった。

アレッサはポーチの中から“樹海の世界”で手に入れた欠片を取り出すと強く握った。

一瞬にして鉄のシャベルが現れる。手に馴染む重さ、全てがアレッサの理想通りだった。

シャベルの先を砂に突き刺す。まるで水にシャベルを突き刺すようにつつという間に沈んでいった。

掘り返した砂の後には新たな砂が積もる事は無く、深く掘られた跡が残っているだけだった。

シャベルの動きを止めて、ポケットの中にある懐中時計を確認。時間は丁度十分が経過していく、どうにもこの世界はいつもの世界よりも時間の経過が遅いみたいだ。

いつもは時計の針が一周したら世界は崩壊を始めるが、しかし針の進む速度は世界によってバラバラで、今回の“砂漠の世界”は特に進むのが遅い。

もつとも、時が進むのが遅い事はアレッサにとって有益な事には変わりないが。

再びシャベルの動きを進める。

どれくらいの時間を浪費しただらう。水をすくい上げるより砂を堀り、それでも体に疲労が溜まらない。

照りつける太陽もどういうわけかまったく暑いと感じる事もなく、ただ一心に地面を掘り続けていた。

その時、シャベルの刃先が硬い物にぶつかった感覚。鋭い音を立てながら衝撃はアレッサに跳ね返った。

何か見つけられたのだろうか？ 淀んだ瞳でアレッサはシャベルを地面に置いて硬い部分に降りて手で堀り始めた。

穴はおよそアレッサの腰辺りまでの深さがあり、飛び込むと下半身がスッポリと隠れた。

手で穴を堀り進めると手のひらに硬い感覚が続く。不審に思ったアレッサはそれを掴むと思い切り引っ張り上げた。

砂の中から姿を現したのは鏑だらけの鎖だった。その鎖はまだまだ連なつていて、どうやらどこかに取り付けられている物らしい。鎖をどんどん引っ張り上げる。ジャラジャラと煩い音を上げながらその全長をどんどんと露呈する。

一心不乱にそれを行つた。

ふいに引っかかる感覚。今まで鎖を引き上げ続けてきたアレッサにはそれが違和感に感じた。

それにこれは引っかかっているというよりも、鎖の先の重りを引つ張つているかのようだ。

思い切り鎖を引いた。勿論、声を出さないよ。

するとアレッサの前方数メートル先に地面が割れて正方形の穴が誕生し始めていた。激しい砂埃を上げながら穴は広がっていく。さらに強い力で引くと穴もさらに広がる。遂にはアレッサの体重を使って穴を完全に広げた。

あんなに強い力で引いたのに体に疲労が溜まらない。やっぱりこ^レは不思議だ。

全体重を使って引いていた為に穴を広げる時に尻餅をついていた。アレッサは立ち上がり、砂を払うと広がった穴の方へ向かった。どうやらいままでアレッサが引いていたのは地下の扉のような物だつたらしく、地下へと続く道には階段が設けられていた。

覚悟を決める為に改めて砂漠を見渡す。するとなぜか逆さのピラミッドが激しく回転していた。

回るペリカンド。ペリカンドの上では奴隸が踊り狂っている。下方の地面では棺から飛び出したミイラが必死にペリカンドを回している。

そしてそれを助長するよつて「一體のスフィンクスも勝手に動いていた。相変わらず頭に青筋を浮かべて真っ黒のモザイクを皿に乗せながらぐるりぐるっと回っている。

奇妙すぎるその光景から一秒でも早く逃れよつてアレッサはすぐに地下の階段へと足を下ろした。

後ろからモザイクの掛かったスフィンクスの叫び声が聞こえるが気にしない。

階段を急ぎ足で降りる。幸いにも“樹海の世界”の時のように階段は永遠と続くような物ではなく、あつといつ間に地下の入り口に到着した。

古びた木の扉を開くと視界に広がるのは巨大な歯車の群れ。大きい物から小さい物まで、金属で出来た物から木で出来たものまで、白から黒まで様々な歯車が揃えられていた。

全体的に埃を被った部屋。天井に吊されている黄色の光を発する電灯だけが頼りだった。

歯車の部屋を抜けたとさらに下へと続く螺旋階段があつた。
まるで“浅瀬の世界”の時の再現だ。螺旋階段の外は真つ暗で轟
音だけが聞こえる。

アレッサはポケットライトのスイッチを入れるとポーチから再び
“管の世界”で手に入れた欠片を取り出し、強く握った。
緊張だと不安だとが抜けていき、冷静さだけが取り残された。
アレッサはそのまま螺旋階段を降りていく。下に行くにつれて轟
音は大きくなつていつて、頭が痛い。

そうしてたどり着いた最下層と思わしき場所。

そこは妙に近代的な作りになつていて、先ほどまでの砂だらけの
場所とは打つて変わつていた。

薄汚れた四角いタイルが敷き詰められたら部屋。電灯が無いはず
なのにここは妙に明るい。

そして部屋を囲むように両側の壁に設置されている大きなガラス
のカプセル。ポコポコと泡を吹いていて、緑色のカプセルには人の
赤ん坊と思わしきものが眠つていた。

緑色のカプセルの中にはそれらが沢山入つていた。

カプセルに取り付けてある人口呼吸機。それはカプセルの中にもあつて赤ん坊達に取り付けられていた形跡もある。

しかし今はその全てが外されていて、つまり死を意味しているのではないのだろうか。

特に気になつたカプセルがあつた。部屋の一一番奥の一際大きなカプセルだ。

そのカプセルだけは人口呼吸機が外されておらず、カプセルの中には二人の人。

そのカプセルに近付いて覗くと、アレッサは仰天した。だつてカプセルの中に入っていたのはアレッサの姿をした人だつたのだから。裸のままカプセルの中で深い眠りに就いている。これだけは人口呼吸機は外されていない。

そしてアレッサの姿に良く似た人の隣で眠っているのは赤ん坊。こちらは目にモザイクが掛けられてはいて顔を見る事はできないが、人口呼吸機が外れている事から、やつぱり。

どういう事なのだろう？ アレッサは頭の中で答えのない疑問を巡らせていた。

そしてもつと良く見てみるとある事に気が付いた。

二人の間にへその緒が繋がつてゐる。赤黒い色をしたそれは緑色のカプセルによつて変色してゐた。

一体どういう事なのだろう。アレッサは頭を抱えた。

“浅瀬の世界”で見つけたスプーンの形をした石灰の像、アレッサの形をかたどつた二つの像。“管の世界”では妊婦の体の中から出てきた二つの赤い玉。さらに一度帰つてきた現実世界で見つけた二つのへその緒。そして今回のカプセル。

訳が分からぬ。アリスはアレッサに「こゝは君の黒の世界」と言つていたが、果たしてどういう意味だつたのだろうか。

自分自身が望んだ世界、アレッサにはそう解釈する事しか出来なくなつてゐた。だが一方でこんな狂氣じみた願いは無いと否定するアレッサもいる。

そもそも自分はなぜこんな所に連れて来られたのだろう。アレッサは一番最初に抱いた疑問へと帰つてきてしまった。

カプセルをぐるりと一周した時に、まだ奥に道がある事に気が付いた。

アレッサは無我夢中で奥へと進む。

細い通路を出た先はなぜかピラニアードの上だった。ピラニアードのアラジンの上で踊り狂っている奴隸のミイラはアレッサに気付く事はない。恐るおそる一歩踏み出す。軽快とも滑稽とも取れる音楽が聞こえてきた。

ポケットに突っ込んだある懷中時計を確認。時間は一十分を経過したといった感じで、まだ余裕はある。

アレッサはピラニアードの中心の方へ向かって歩いていた。奴隸のミイラが中心を囲むように踊っていたからだ。

そういえば。アレッサは思い出した。

アレッサは以前にも砂漠に来た事があった。勿論こんなふざけた砂漠ではない。旅行のために母親のリサと行った時だ。

なぜだかこの砂漠は雰囲気が陽気な感じがして、アレッサが以前行った砂漠に似ている気がした。

「ここは君の黒の世界」アリスのその言葉が脳裏を掠めた。もしこの黒の世界がアレッサの理想だと記憶だとを辿るために世界だとするならば、一体これからどうなるのだろう。いくら考へても答えはなかつた。

考えても答えなど出ないのについつい錯綜してしまひ。

ペリカニシードの中心に立つて呆然と立ち廻っていた。まるでこの立ち位置は儀式の生け贋のようじやないかと。

早々にここから立ち去ろう、どうにもここは“切符”は無むれうだし。やう思つて踵を返した途端に気が付いた。

今まで踊り狂つていたミイラ全員がアレッサをじつと見つめている。それはまるでここから逃がさんとばかりに。

ぎょっとして思わず声が出来たくなるのをよつやくへじひで一步後ずさる。

すると頭上から何か音が聞こえてきた。それに伴い暖かい光も。何事かと上を仰いでみたらあまりの驚きに声すら枯れてしまった。そこにはおよそ人知を超えた存在、円盤がふわふわと浮いていて、アレッサを連れて行こうとしたのだから。

意味が分からぬ。今まで理解出来ない場面には数々遭遇してきたが、今回ばかりは本当に意味が分からぬ。

呆然としたレッサはなすすべもなく、円盤へと吸い込まれて行つた。

再び意識が戻った時には円盤、つまり宇宙船の中についた。おそらく黒の世界で最も強かつた衝撃。よく喋らなかつたものだとアレッサは自分を讃めてみる。

“管の世界”で拾つた石を握り、心を落ち着ける。ここで言葉を発してしまつては意味がない。

さらに“浅瀬の世界”で拾つた石も握りしめた。宇宙船の中は水浸しで、モヤが立ち込めていたから。

宇宙船の中には様々な植物が植えられていて、床の水を吸つて生きているのだろう。

さらに気になるのは壁一面のピアノだ。円形の壁をぐるりと取り囲むようにピアノの鍵盤がひしめき合つていた。

円盤の奥の部屋に通ずると思わしき扉がある。扉にはわけの分からぬ文字が刻まれてあって解読は不可能だった。

扉へと近づくとそれは自動で開き、奥の部屋が見渡せるようになる。

その部屋は円盤の操縦室のようで三人の宇宙人が難しそうな機材をいじっている。

宇宙人達はアレッサに気付いていないのかひたすらに機材をいじつた。

間もなくして轟音と共に宇宙船は突然止まつた。
どうやらどこかに墜落してしまつたらしい。宇宙船の中について衝撃はそれほど感じる事はなかつたが。

操縦室から出ると出口と思わしき場所が開いていて、そこから外に出れるみたいだつた。

アレッサは恐るおそる外に出てみた。するとそこには今までの砂漠ではなく、乾いてひび割れた地面に大きな岩が「ロロロ」と詰まれた場所だつた。

もしかしたら廃墟と形容しても良いのかもしれない。岩の他に電車の車両や車などの不燃「ミミ」の山がそこら中に誕生していたから。乾いた地面に一步足を下ろし辺りを見回した。遙か遠くでまだピラミッドが回つている。どうやら“樹海の世界”の時のように違つ世界に飛ばされたわけではないらしい。

アレッサは再び積み上げられた岩の山を見上げた。不安定な構造をしていて、あと少しで一気に崩れてしまいそう。

歩き出した時にアレッサはふと地面を見つめた。何かが転がり落ちた音がしたからだ。

それは青い石。着色されているわけではなく、元々青い色をしているみたいだ。

それに妙に透き通っている。一瞬宝石だと勘違いしてしまうくらいに綺麗なそれ。

アレッサはそれを手にとりつつとつと眺めた。

目を閉じて、また開く。するとそこには傘。

青い傘はアレッサの手にしっかりと握られていて、なんだか傘がふわふわする感覚がした。

これが“砂漠の世界”での願いの欠片。アレッサはすぐに分かった。こんな変わった石は他に無いし、何より握つただけで自分の理想になるなんて間違いないと。

日傘だろうか、まるで日光を通さないそれにアレッサは心強く思えた。

気を取り直して再び“切符”探しに戻る。

積み上げられた岩の山は不安定な形をしているのに、どうしてかアレッサが登つてもビクともしない。おそらく緻密に組み上げられて、絶対に崩れないようにされているのだろう。

間もなくして岩の山の天辺まで登ると辺りを一望した。ここからなら周りが良く見える。

するとアレッサが登った岩山よりも高い岩山の天辺から不自然な形で大木が生えていた。

その景色があまりにも不思議だつたのだろう。アレッサは一步近づいてそれを見ようとした時。

ふいに宙に浮く感覚。アレッサは足場を踏み違えて、岩山から落ちた。

声を出す間もなくアレッサの体は一回転をする。傘を開いたままだから随分と不格好に。

しかし、アレッサが落下する速度は次第に緩まり、遂にはふわふわと左右に揺れながら地面に降りていった。

上を見るとアレッサが握つていた傘がいつの間にかパラシユートのよう傘の中心に向けていくつも穴が空いていて、傘自体も随分と大きくなつていた。

ただの日傘だと思つていたら、とんだ便利品だ。アレッサの頬は小さく綻ぶ。

地面に降り立つとわざと見た岩山に向かつて歩き出した。傘は差したままで。

今度の岩山はさつきの岩山よりもずっと高い。注意して登らなければ。心の中で言い聞かせる。

そうして片足を岩山に掛けた。

岩山を登りきると目の前に現れたのは一本の大木。しかし大木は既に枯れ果てていて、葉が生い茂つてない。

そして地面の割れ目からは灰色の煙。もくもくと小さく昇ついて、そして途切れる。

アレッサは傘を畳むと割れ目にに向かってそつと指で撫でてみた。存外にも割れ目は脆く、指で少し押した程度で凹んでしまった。

今度は“樹海の世界”で手に入れた石を取り出し握る。すると手に収まるくらいの大きさのスコップ。

どうやらこの石はアレッサの考えに応じてシャベルが大きくなつたり小さくなつたりするみたいだ。

アレッサはスコップの先を割れ目に突き立てる。掘るといつよりも壊すに近い。

割れ目はあつといつ間に崩れてしまい、地面の中がどんどん見えてきた。

掘り終わった手を止める。地面の中に見えた物に呆気に取られていた。

地面の中には赤い光が充満していくそれだけで息苦しそう。

本当はこんな所に来る事自体望んでいないのに。心の中でアレッサは愚痴る。

他に目指す場所もない。時間はあまりないが、あても無く歩くのは時間を無駄にするだけだ。

アレッサはポケットの懐中時計を開く。丁度半分の時間が経過していく、ゆっくりと散策がしていられなくなっていた。

再び掘り返した地面を見る。赤い光はさながらサイレンを反射させたかのよう。

固唾を飲み込んで、恐るおそる片足を穴に向けて入れた。特に何も変化は無い。

今度は地面に腰を下ろした状態で両足を穴に入れた。それでも何も変化はない。

遂にアレッサは腰の辺りまで穴を入れてそろそろと穴に落ち始めた。

声を出さないように、覚悟して両手を一気に離す。一瞬何かが擦れる音が聞こえたかと思つとアレッサの体は重力の法則に従つて落下した。

必死で声を出さないようにとこりえていたら、全身が水に浸かる感覚。しかし呼吸は出来る。

アレッサはキヨロキヨロと水の中を見回した。赤一色の世界。強い赤、弱い赤、濃い赤、薄い赤。

沢山の赤がアレッサを囲んでいた。

夢を見ている気分だった。いくつもの記憶を遡つていくよつた、そんな夢。

だけれどその記憶というのはアレッサの物ではなくて。
真つ赤な世界。円形に切り抜かれた地面の真ん中にアレッサはいた。

そこは映写室のように暗く赤い。筒状の壁に貼り付けられているのは映画のフィルムのように切り取られた誰かの記憶。
誰かの記憶だというのにアレッサは懐かしく感じた。妙な親近感に心が緩む。

記憶の中にはアレッサが黒の世界にさまよつてから見知った物もある。そして何より、一枚の記憶に映されたものはアレッサ自身。
その記憶にはアレッサが恐怖している姿が映し出されていた。しかも随分と近い。

これは一体誰の記憶なのだろうか、いやそもそも記憶と呼べる物なのだろうか？ アレッサは悩む。

すると周りの壁はだんだんと溶けていき、奥行きのある空間がアレッサの眼前に広がつていた。

真つ赤に広がつた世界。その奥には、黒い入り口と思わしき物体が三つ佇んでいる。

赤い壁に三つの黒い穴が空いている。それらは長方形に綺麗に切り取られている。

アレッサは不審に思いながらも一番左の穴に歩みを進めた。奥は真っ暗で、ライトを点けても何も見えない。

さらに奥まで歩く。そこに階段があるのか、アレッサはどうぞんと降りている感じだ。

そしてしばらく黒一色だった世界に薄い赤色が滲んでくる。赤色は段々と濃くなってきて、それに伴い機械の稼動音のような音も。

最下層に到着したのか、今まで狭かった両側の壁は一気に消え失せ、さつきのような赤い空間が広がっていた。

ただ違つのは、その部屋に沢山の重厚な機械が置いてある事。

重苦しい空気が漂つそこにアレッサがポツンと佇んでいる。

心臓の鼓動が高鳴る、血液の流動が早い。恐怖というよりも切なさを感じさせる。

機械のそれぞれには細長い管が取り付けられていて、その管の先には。

形容出来ない物体がいた。果たしてこれが生き物なのかそうでないのかの判断すらつかない。

全体的に赤い色をしたそれ。丸い球体から手足が突き出たみたいに姿は不格好だった。

一見すると猿のようだが、よく見るとどちらとも言えない。

赤い球体の部分にはファスナーが付いていて、ソノファスナーは開かれている。ファスナーの中には摩訶不思議な色の靄。靄の中には星屑がちりばめられてあって、アレッサは不思議とそれには魅了されていた。

重厚な機械の管は猿に突き刺さつていて、どうやらファスナーの中の物を奪い取られているみたいだ。猿は泣いている、動物は泣かないのに。

いやそもそもこれは猿じゃないのかもしれない。だけれどこのままにしておくのはあまりにも可哀相。

アレッサは猿に突き刺さつていて管を抜いてやろうと思ったが、猿は壁に磔にされていてアレッサの身長ではファスナーの部分までしか手が届かない。

管はとても硬く、引き抜ける様子はどこにもない。

アレッサは諦めて猿に向けて手を伸ばした。手を伸ばした先は、猿のファスナーの中。

アレッサは猿の体に付いているファスナーに向けて手を伸ばした。妙な胸の高鳴り、吹き出す汗を無視出来ない。

するとアレッサは体ごとファスナーの中に引き込まれようとしていた。

声を出す間もなく体の半分がファスナーの中に吸い込まれていた。そして間髪入れる事なくアレッサの全身はそのファスナーの中に入ってしまった。

真っ赤な世界に残つたのは磔にされた猿の姿のみ。

目を覚ました先は見覚えのある牧場。紛れもなくアレッサが住んでいる牧場だつた。

だが何かがおかしい。そこにはおよそ生命の気配が一つも感じられない。牧場にいるはずの牛や羊も、家畜をいれる為の納屋すら存在しない。

柵に囲まれた牧場にアレッサは一人だつた。右側からそよ風が吹き、牧場の香りが漂う。

「ここは？」

思わず口を開いてしまい、慌てて口を噤む。しかし辺りに何も変化が無い事を知るとまた不思議に声を出した。

牧場は真夜中で、空を仰ぐと満天の星空が覗いた静かな夜だ。

ポケットに入っている懐中時計で時間を確かめてみても、懐中時計の秒針は進まない。

「それじゃあここはわざわざ今までの世界とは違うの？」

一人呟く。今まで喋る事が出来なかつた分、思いつきり言葉を吐き出したい気分に陥つていた。

アレッサは牧場の周りを歩いた。時には柵を越えたり、時には牧場の真ん中で寝そべつてみたり。

しかし何も起こらない、何も変わらない。

「夢なのかな？」

おもむろに呟いた。もつ夢といつ都合の良いもので全てを解決したい。だが、それならば黒の世界の事だつて夢になつてしまつ。

アレッサは頭を抱えた。どうして自分ばかりこんな目に遭わなければならぬのだろうかと。

牧場を歩き続けてどのくらいの時間が経過した事だろうか。

アレッサは牧場の隅に草に埋もれている一枚の石板に気が付いた。近付いて確認してみると、石板には何も書かれていない。しかし石板は地面にしつかりと突き刺さつていて、抜く事すら叶わない。

「墓石かな？」

その石板の形をはつきりと分かるようにそっと指先で撫でる。指先に残るざらついた感覚、なぞった部分がヒリヒリとした。その途端に頭の中に流れる言葉の螺旋。それは確かにアレッサの頭の中に入り込んできて、アレッサは思わず石板から手を離した。誰かの言葉、だけれどその言葉が果たして何を意味しているのか皆田見当もつかない。

結局、アレッサの頭の中に言葉の螺旋が流れ込んできたのはたった一度きりで、それ以降は何回石板に触れても不思議な感覚に陥る事はなかった。

結局あれは何だったのだろう? アレッサは訳が分からぬまま急激な眠気に襲われた。

そして無意識的に芝生の上に倒れ込んでしまった。

まるで夢を見ていたような感覚だった。獣の体に付いていたファスナーに手を入れたら奇妙な感覚に襲われたと思っていたのに、気が付いたらまた元の場所に戻っていた。

もう、どれが現実で、どれが夢か分からぬ。アレッサは堪らなく泣きだしたくなつた。

磔にされた猿の下に鎧びた鉄の塊が落ちていた。
アレッサはそれをしげしげと見つめてようやくその物体が何なのかを理解した。

鎧だらけの鉄の塊。それは鍵の形をしていて、ようするに今までアレッサが追い求めていた“切符”だったのだ。
この“切符”を取ればこの世界に居る必要はなくなる。そう考えるだけでなぜだかほっと安堵した。

アレッサは“切符”を拾い上げ、それを胸に当てる。本来ならばここにはアリスがいた。なのに今はいない。

言いようの無い閉塞感に胸が押し潰されそうになつた。それでもアレッサはこの黒の世界での旅を止めない。
アレッサの目的地までたどり着く事がアリスの願いだつたから。

突然、赤い世界の天井から鎧だらけの螺旋階段が現れた。まるで“浅瀬の世界”の時のことだ。

アレッサにはそれが列車に帰る為の道だといつ事を無意識的に理解していた。だから階段を上り始める。

誰もいない赤い世界には、一人分の靴音だけが空間に響き渡る。

螺旋階段の終着点はやはり列車の前だつた。列車は既に蒸氣を吐き出していて今にも出発してしまいそうだ。

アレッサは今まで溜め込んできたため息を一気に吐き出した。列車の近くでなら言葉を発して良い分だけ、一つの世界を抜けてきた後の精神的疲労は尋常ではない。

懐中時計を見ると、あと一分もしない内に世界が破滅する寸前だつた。“砂漠の世界”の青空に赤色と黒色の亀裂が走つていて、そして亀裂からドロドロの汚い液体も。

アレッサは列車に飛び乗つた。その途端に列車は出発を始め、崩れゆく世界に別れを告げた。

車両の中に入ったアレッサを迎えてくれたのは、シンシアとダイヤだつた。

彼女達はアレッサを見るなり手招きで隣の席に座るように促してくれる。

アレッサもさして疑う事もなく大人しくシンシア達の隣の席に座つた。

アリスはいないが、その事をシンシア達に伝える方法も必要もない。だからアレッサはずっと黙つっていた。

先程から喋り続けるダイヤ。

「そういえば、ダイヤさんは奥さんを探してこの列車に乗っているんですね？」

列車に乗つてからしばらく無言になつていたアレッサは思わずダイヤに尋ねた。

ダイヤは頷くと再び背広のポケットから古びた写真を取り出した。だけどその写真はアレッサが前に見た物とは少し違つていた。なんだか写真全体にモヤがかかっている気がする。

確かににはつきりしていた写真の中の一人の輪郭が、うつすらとぼやけていたのだ。

「妻とは離れ離れになつてしまつて、離婚つて意味じやなくて文字通りの意味。妻は“花の世界”で待つてているというメモだけ残して行つた。だから私はそこに行く為にこの列車に乗つている」

真つ黒に塗りつぶされた顔は段々と俯きがちになつてしまい、声

音も弱々しくなつていた。

ダイヤは妻に会いたいのだとアレッサは直感で理解していた。

「しかしその約束ももうじき叶つ。あと少し進んだら“花の世界”に到着するらしいんだ。そうすれば、また会える

“花の世界”。果たして自分もそこに行つて“切符”を手に入れ
るのだろうか？アレッサは考えた。

小さく揺れるアレッサの体。それは端から見たらあまりにもみす
ぼらしく見えていた。

列車の外から見える小さな光の束。それは等間隔に伸びていて、
アレッサ達の体をうつすらと照らしていた。

しばらぐして、金属が擦れ合つ音と共に列車が動くのを止めた。
どうやら車両編成やらなにやらで、次に出発するのは夜になつてか
らりじー。

もつとも、ここは地下らしく日の光なんて全く差し込まないが。
「次の出発までは大分時間があるのでけれど、あなたはどうするの
？」

シンシアはアレッサに尋ねてきた。どうやらシンシアとダイヤは
この車両に残るらしげが、アレッサはどうするのか知りたかったの
だろう。

ここに居ても気持ちが落ち着く訳じゃない。そう思つたアレッサ
は下手な作り笑いを浮かべた。よく考えたらこの世界で他人に向か
つて笑うのって本当に久しぶりだと思った。

早々に列車の中から立ち去りつとした時に声をかけられた。それは意外にもダイヤだつた。

「アレッサ。分かつてていると思つけれど、列車の外に出て離れたら絶対に言葉を発してはいけないよ。分かつてるよね」

念を押すようにアレッサに詰め寄るダイヤ。その態度が今までと少し違つていて思わず後ずさつてしまつた。

「分かつてますよ。どうしたんですか、急にそんなに真剣になつて？」

ダイヤをたしなめるようにアレッサは返答した。するとダイヤは自分の言つていた事に気が付いたのかアレッサから一步引く。

「君は今までそれぞの“世界”にしか出た事はない。だからこいつた“世界”とあまり関わりがない中継地点のよつな所で気を抜いてしまうのではないかと心配してしまつたんだ。すまない」

そのダイヤの態度に思わず吹き出しそうになつてしまつた。アレッサはまるで父親みたいじやないかと思わず考へてしまつ。

アレッサはダイヤに軽い会釈をして外に出た。

外はまるで地下鉄の中だった。円形に掘り進められたトンネルが何層にも渡つて奥に続いている感じ。

トンネルの上部に等間隔に取り付けてある黄色いライト。強い光を発している筈なのにこの巨大なトンネルの中では足元をぼうつと照らす位の効果しかない。

トンネルの中には以前アレッサが列車の車両が外れる時に仕事をしていた顔が花の小人がいた。

小人は自分のサイズのスコップを両手で持つていて、石炭を運んでいる。

その他にも色々な仕事をこなしている小人がいた。トロッコで石炭を運んだり、トンネルの外側の鉄骨を組み立てていたり。

その花をススで真っ黒に汚しながらも気にする様子は全くなく、アレッサの事にも気づかずに黙々と作業をこなしているだけ。

アレッサはトンネルの壁に取り付けられているドアを手に取った。木製の古めかしい、今にも朽ち果ててしまいそうなそれ。

木が軋む音を立てながら目の前に広がったのは真っ黒な空間と赤い線の数々だった。

黒い空間に広がる赤い線の数々。よく見るとその赤い線は鉄骨で、なにやら鉄塔を組み立てているみたいだつた。

それにしてもこの鉄塔は随分と大きい。一体何を作つてゐるのだろうか。

するとアレッサの目の前に赤い鉄骨を組み立てて作られたと思われるエレベーターが上から降りてきた。エレベーターの中にはさつきの小人の姿。

小人全員がエレベーターから降りるとアレッサはすかさずエレベーターに乗つた。エレベーターには移動する為のボタンは無かつたが、アレッサが乗つた途端にエレベーターは上に昇つて行つた。エレベーターの中は揺れが酷い。金属が擦れ合う音にたまらず耳を塞いでいた。

するとエレベーターは止まり、そこには鉄骨を並べただけの粗末な足場が広がつてゐるだけだつた。

およそ一人一人がやつと歩ける程度の幅しかない。それに手すりだつて存在しない、風が吹いてしまえばひとたまりもないだろう。アレッサは一瞬ここに来た事を後悔してしまつた。

白の世界と黒の世界の狭間の世界の事を思い出していた。

あの時はアレッサはパイプの中をひたすらに走つていて、アレッサが走つた後ろからシャッターがどんどんと降りて行つた。

外から差し込む真つ赤な光で視界は悪くなり、奥に進む度に壁、天井に付いているプロペラの量が増えて行つた。そして最後の辺りはパイプ全体に謎の文字が螺旋状に書かれていた。

アレッサはあの時の事を思い出していた。何となく、ここには雰囲気的に狭間の世界と似ていて直感したからだ。

アレッサは鉄骨から足を滑らせて落ちてしまわないように慎重に歩いた。風は止んでいて、突風に扇がれる事は無かつた。

長く、狭い鉄骨の道を抜けると、今度は円形の場所に梯子が幾つもの存在していた。どうやら梯子はそれぞれ違う場所に繋がっているみたいで、どれにするべきかとアレッサは悩む。

暑くもないのに遠くで陽炎が生まれている。鉄を叩きつける音が、真つ黒な空間に幾重にも広がっていた。

梯子に手を掛けた。そして、滑るように降りる。

はたしてこの奥に何があるのかアレッサには想像すら出来なかつた。ただ一つはっきりしているのは、楽しい事じやないという事だけ。

赤い梯子を降りると今度は両側の壁がネットで張られた通路が現れた。これで間違つても落ちてしまつ心配は無くなつたが、不安はどんどんと強まっていく。

アレッサはポーチの中から“管の世界”で手に入れた石を握る。相変わらず、この石には何度も助けられるとアレッサは心の中で呟いた。

激しいボイラーの稼働音が近くで聞こえた。時折ネットの向こう側から見えるオレンジ色の光、溶鉱炉の熔岩みたいだ。

そうして通路の最深まで行き着くと再び上を仰いだ。最深部は当たり前だが行き止まりになつていて、そこはドーム状にぽつかりと空間が広がつていた。

そしてその空間の真ん中には“浅瀬の世界”で見た時の一つの蠍人形。

一つはアレッサで、もう一つはインクで塗りつぶされている。

また、「一一〇」。アレッサは「一一」という数字に奇妙な感覚を抱いていた。

なぜなら“浅瀬の世界”でも“管の世界”でも現実世界でも“砂漠の世界”でもここでも印象深い出来事は全て一一〇一組であったからだ。

アレッサはその蝶人形に手を当てた。それはアレッサの形をした蝶人形ではなく、もう一つの塗りつぶされた方。

一体この像はなんなのだろう？ 姿形はアレッサの像とそっくりだが、顔がインクで塗りつぶされているのでよく分からぬ。

そうして像に手を置いたままで静まる。心臓の鼓動だけが煩く感じていた。

その時、何かが聞こえた。

とつさに集中を乱して辺りを見渡すが、何も見当たらない。

アレッサは訝しげに思いながらも再び像を見つめ直した。

その時、また声が聞こえてくる。今度はさつきとは違い、頭に直接流れてくる感じ。

アレッサは慌てた。石を握つたままだといつのこと、こんなにも慌てたのは初めてだった。

段々と視界が白く霞んみ、見えてくる映像。

黄昏の電車の中だつた。
幼い姿のアレッサは母親のリサ抱かれて安心して眠つてゐる。そしてその座席に反対側にいるのは、アレッサの姿をした違つた誰か。悲しそうな顔をして二人の姿をじつと見つめている。

電車の窓の風景が矢のように吹き飛んでいく。

夕焼けの太陽が海に沈んで行く。陽光が吊革に反射して幻想的な空間を生み出していた。

小気味良い電車の振動に揺られながら幼い姿のアレッサは浅い微睡みに酔つてゐる。

それを見ていた反対側の人は口を開いた。しかし声は聞こえてこない。

長いセリフではない、五秒もしないで開かれた口は再び閉じられ、人は座席が立ち上がつた。

そして別の車両へと消えて行き、一度と現れる事はなかつた。

白い霧が視界から晴れてアレッサは我に返つた。アレッサは今まで誰かの映像を見せられてゐたのだ。

蝋人形は一つともすっかり溶けてなくなつてしまつてゐる。

アレッサはさつき見た映像の事を一体何だつたのだろうと考えた。

新鮮でありながらもどこか懐かしい情景を今し方見終わったアレッサは呆然と立ち尽くしていた。

あの情景を見せて一体何をしたかったのだろう？ アレッサは首を傾げた。

それにあの蠟人形、“浅瀬の世界”で見た物とまったく同じだった。

まるでアレッサだけにそれを見せているような気がしてアレッサは不気味に思う。

アリスがいつた「君の黒の世界」という言葉の意味に何か関係があるのだろうか。

アレッサは辺りを見渡したが後は何も無く、遠くで鉄を叩く音だけが聞こえた。真っ黒な空間に浮かぶ、四角い箱を頭に被った男も奇妙だ。

元来た道をもう一度辿る。不思議と来たときのような恐怖心とか不安感は無くなつていて、むしろ妙な安心感を持つていた。

相変わらず頭が花になつている小人があくせくと働いていて、数人で自身の数倍の大きさもあるトロッコを引いて動かしていた。また不安定な足場を戻り、列車へと戻る。

列車の前に戻る頃には丁度出発する手前だった。

「奥さんの事、少し話してくれませんか?」

列車に乗り込んで落ち着くとアレッサはダイヤに話しかけた。

ダイヤもまさか自分に話しかけられるとは思っていなかつたので、驚きを隠せないでいる。

しかし少しして落ち着きを取り戻したダイヤは改まって話を始めた。

正直、アレッサにとつて時間を潰せる物なら何でもよかつた。本当なら他人の過去に首を突つ込む程世間を理解していない訳ではない。

しかし今のアレッサは混乱の渦中にいて、その混乱を晴らせるなら何でも良いと思っていた。

「私と妻は昔から幼なじみでね、だから小さい頃はよく一人で遊んだものだ。よく喧嘩したけれど、そのたびに仲良くなつてね」

ダイヤの口から紡がれる言葉はとても優しく、今のアレッサにとつては眩しい物だった。

「彼女は昔から泣き虫でそのたびに私が泣きやませてやつたものだ。子どもの頃は分からなかつたけれど、段々と彼女が異性として気に入っている事が分かつてしまつたんだ」

「彼女はいじめられていた。学校で女子に髪を引っ張られて切られたり、教科書を捨てられたりもしたみたいだ」

ダイヤの過去の話は意外に長い。それはダイヤが妻を想い過ぎているだけか否か。

「それで助けていたんですか？」

「いや、助けなかつた。というよりも見て見ぬふりをしてた。彼女は泣き虫だけれど、泣いた後には必ず笑うから。それで全てが解決していると思っていたんだ。だけど実際は違つて、いつだつたか彼女は本当に壊れてしまう寸前まで来ていた」

悲しそうな口調。表情は見えないが確かにダイヤは今悲しんでいた。

アレッサはそれをただじつと黙つて聞くばかり。しかし不思議と嫌な気はしない。

「彼女はやっぱり泣いた。だけれど泣いた後に笑う事が出来なくなつていた。悲しい現実だよ、彼女を一番守れる筈の私が彼女を見捨てていたのだから」

アレッサの隣に座つてゐるシンシアもいつの間にかその話を静聴していた。

その車両だけ悲しさが舞つていて。

「自分が泣いている原因を誰にも話せないまま、彼女はいつの間にかふさき込んでしまった。それは当然の結果で、彼女をどうにかしようと誰も思わなかつたから」

深くかぶつっていたシルクハットを脱いでそれをクルクルと手で回す。シルクハットを脱いだダイヤはやはり真っ黒で、脱いだ意味があまりなかつた。

アレッサは列車の外の真っ黒な風景をじっと見つめる事しか出来なくなつていた。

そういえば、母親のリサも昔は学校でいじめられていたと言つていた事をアレッサは思い出した。

「それから私達はしばらく会つ事はなくなつてしまつた。お互いなんとなく疎遠になつてしまつたし、口で本音を伝えたわけでもないから。だけれどいつだつたか、私と彼女は道端でたまたま会つ事が出来た。彼女は変わつてた」

その時のダイヤの口調は明るくて、今までの陰鬱な雰囲気などあつという間に吹き飛んでいた。

「それで、どうしたんですか？」

たまらずアレッサもダイヤに尋ねる。

「彼女はすっかり美人になっていた。私が話しかけて、おこがましく思われるんじゃないかつてくらい。だけれど彼女は私の事をしっかりと覚えていてくれて。それが嬉しくもあり、後ろめたく感じていた」

再びダイヤは話を始めた。こんなに饒舌な人はこの世界では初めてみた。アレッサは心中で半分ほど驚いて、半分ほど呆れていた。シンシアは自分の爪をいじりながらシンシアの話を聞いている。彼女もダイヤの話にまんざら興味が無いというわけではなさそうだ。

「当時私はカウンセラーとして働いていた。どうしても幼少の頃の彼女のいじめられていた姿が忘れられなかつたからだ。だけれど再び会つた時は彼女は見違える程に成長していて、私程度の人間じゃ釣り合わないと思っていた。だけれど、久しぶりに出会えた事がありにも嬉しくて、私達はついつい話が弾んでしまつた」

ダイヤは座席から立ち上ると車両と車両とを繋ぐ扉の前に行き、
“切符”を取り出した。

まもなくして車掌が現れた。そうして改めて気づく、ここでの車両は“破滅”するのだと。

アレッサも“樹海の世界”と“砂漠の世界”で集めた“切符”を取り出した。

アレッサが“切符”を見せると今度はシンシア。彼女の“切符”は宝石のようにキラキラした石で、見ていて美しい。

車掌に案内され、次の車両に乗り込む。その瞬間に前いた車両は切り離され、闇に飲まれて粉々に碎けて行つた。

アレッサも一度だけああいう状態になつた事を思い出した。しかしあの時はどうこうわけが助かつた。さらに一度だけ元いた世界にも帰れてしまった。

確かに黒の世界と白の世界は繋がつているという事を確認できたが、白の世界に帰る時にアレッサに話しかけてきたあの少女が気になつていた。

まるでアレッサがこの黒の世界から帰りたくないとばかりの口調で引き止めていた。

あれは一体、なんだったのだろう？

新しい車両は食堂の車両のようで、丸形テーブルの上に沢山の食べ物。

「これ、食べられるのかな?」

アレッサはおむすおむするテーブルの上に出されている食べ物に手を伸ばした。

そういうえばアレッサは今まで黒の世界で食事をとった事がなかつた。ただ単に食べ物が見つからなかつたというのはあるが、何よりも空腹感に苛まれなかつた。

空腹感だけじゃなく、一部の例外を除けば暑いとも寒いとも、痛いとも疲れたとも感じなかつた。

それは一番最初にアリスがアレッサに向かつて黒の世界の説明をしたとおりの事であつた。

“浅瀬の世界”での出来事があまりにも遠い昔の事に思えて仕方がない。相変わらずこの世界には慣れはしないが。

ダイヤとシンシアはそれぞれの椅子に座つてアレッサが座るのを待つてゐるみたいだつた。どうやらまだダイヤの昔話は続いているみたいだ。

アレッサは急いで近くの木製の木に座つた。それで満足したのか、ダイヤはゆつくり深く頷くとようやくその口を開いた。

「それじゃあ続きを話すつか。私の過去の話を

「しばらくしてお互いに数年の年月を経た時だ。私達はいつの間にか交際を初めていて、いつの間にか幼なじみという枠から飛び出でもいた」

アレッサはダイヤの嬉しそうに話しているその姿をじっと見ていた。そしてダイヤの奥さんってどのような人だったのだろうと考えたりもした。

「いつの間にか一緒に生活をしていて笑い合っていた。彼女も私も昔からお互いを好意的に見てきた結果なのだろうね。とても、幸せだつたよ」

“だつた”。その言葉が妙に引っかかる。アレッサは不意にそこから幸せだった毎日が一変してしまうのではないかと不安になってしまった。

その不安は杞憂でもなんでもなく、それを突きつけられたアレッサは、自分の事ではないのにつらく思えて仕方なかつた。

「戦争が始まつたんだよ。他国との戦争、私は敵領域の前線に駆り出された。自分が生き残る度に沢山の人を殺した、皮肉な話だよ。私はカウンセラーで、人を助ける立場であつたのに」

「激しい戦争だった。何年も続いてお互いの国の中の街は殆ど戦火に巻き込まれてしまつて焼け野原に変わつてしまつた」

話を聞いている間、アレッサはテーブルの上に置かれている食べ物に手を伸ばしていた。ダイヤの話に飽きた訳ではない、ただ何か動かしていないといられない気になつていた。

シンシアは黙つてダイヤをじっと見つめる。氷のように透き通つた蒼い瞳は抑揚なくダイヤを見つめていた。

ダイヤは小さくため息を吐くと真つ暗な窓の外を見ていた。

「もつじき到着する。“花の世界”に。そうすれば私は彼女に再び会える」

それはアレッサに向けて放つたものではなく、自分自身に向けた暗示のような物。

やがてダイヤは窓から視線を離して再びアレッサ達に向けると話を再開した。

「私は戦争に生き残る事が出来た。奇跡と言つても過言ではない、私の部隊は私を含めた数人しか生き残る事が出来なかつたのだから。だけれど生き残つた、いや生き残つてしまつた」

その後、列車はゆるやかに減速を始めた。外の景色は真っ黒から一変して多彩な色が占める花が咲き乱れていた。

アレッサが見たどんな世界よりもそこは綺麗で、列車の中から思わず息を呑んでしまった。

まるで世界を分断するように流れの緩やかな大きな川が流れている、その川を起点として様々な花が咲き乱れている。

自然界では有り得ない青い色の花も咲いていて、蝶や鳥の姿すら見える。

空はピンクがかっていて、雲は相変わらず白だ。

所々から噴出している無色透明の水は太陽の光を浴びてキラキラと光っていた。

「綺麗」

あまりにも綺麗なその世界に、アレッサは思わず呟いていた。

今まで見てきた世界とは決定的に何かが違っていた。

やがて列車は完全に停止し、それと共にダイヤが出口へと向かって行く。

「そうだ、アレッサにこれを渡しておくよ。もう私には必要の無い物だからね」

そう言ってダイヤが手渡してくれたのは、万年筆の形をしたさつきとは別の“切符”。

「君と初めてあつた“管の世界”でたまたま拾つた物なのだけれど、今までずっとタイミングを測つて君に渡そうと思っていたんだ」

アレッサの手に細長い万年筆が力無く手渡される。

ここで“切符”を渡されたということは、おそらくこれは“花の世界”以降でも使用できる“切符”なのだろう。アレッサはダイヤに深く会釈を交わした。

それを見たダイヤは微笑みながらアレッサの頭を撫でた。なぜかその行動がまるで親に慰めてもらつているみたいで、途端に泣きたくなつっていた。

アレッサには父親はいなければ、もし父親がいたりきつところ風に優しくしてくれていたのだろう、と。

「私が戦地から帰つてきた時に初めに訪れたのは妻と共に生活を過ごしていた建物だった。だけれど妻はどこにもいなくて、実家にも避難所にもいなくて私は絶望していたんだ。だけれど遂にある日、“花の世界”で待つてているという手紙が私に送られてきた。私は今すぐそこで、すぐ会える」

ダイヤとの別れ。彼の目的地は“花の世界”で、いまそこにはダイヤの妻がいる。

言葉の使えない世界で、二人は再開する。しかし言葉を使えないからと言つて決して悲観するべきではない。

アレッサは頭を下げたまま、顔を上げる事が出来なかつた。アレッサの目頭にはうつすらと涙を浮かべていて、その涙を誰にも見せまいとしていたからだ。

ダイヤの大きな手がアレッサの頭から離れると、不意に不安に襲われた。なぜ不安を感じてしまったのかはアレッサ自身にも分からぬ。

「それでは、さよなら」

最後に振り返つたダイヤは目一杯の光を浴びていて、何だか笑つているように見えた。

列車から出て花の道を突き進むダイヤ。目指す先は大きな川。川の向こう岸には人がいた。髪の長い、おそらく女性だろう。遠くからで分からぬが、女性はきつと笑つている。アレッサにはそう感じられた。

掌に残された心地よい重みに気づき手を開く。新しい“切符”がそこにはあつた。

列車は再び発進を始めた。段々と景色は消し飛んで行く。

ここがダイヤの目的地。だけれど黒の世界という事はいざれ必ず世界の破滅が起こってしまう。

つまり僅かな時間を自分の目的の為に過ぐす事になる。自分の都合の為に自分が破滅する。

アレッサは思った、今は自分の目的地は分からぬが、この世界にいるという以上、いつかは破滅に導かれる事を覚悟しなければいけないのだろうと。

一度現実世界に戻った時もすぐにここ引き戻されてしまった。

つまり元の世界に戻れる事は分かったが、黒の世界で何かを達成しないと永遠と元の世界にずっといる事は出来ないのかもしれない。

ならばこの世界が何なのかを知らなければならぬ。そしてアレッサの目的地に行けば、いざれはこの世界を解き明かす為の鍵がある筈だ。

根拠はないが、そういう風に決意しないと頭が割れてしまう。

ダイヤに手渡された“切符”を見た。万年筆の形をしていた筈なのに、鍵の形に変化していた。

列車が発進してしばらくの時間が経過していた。

いつの間にか窓の外の風景は暗闇ではなく、黃昏色に染まっていた。

暖かみのある斜陽は紛れもなく本物。紛い物とは思えない暖かみに触れて、アレッサは目を細めていた。

列車は石造りの橋の上を渡っていた。その真下は蜜柑色の水が張っている。どうやらここは水道橋のようだ。

石造りとトタン造りの建物が増えてきた。所々に伸びる灰色の煙突がノスタルジックな雰囲気を漂わせている。

そう言えば車内では殆ど背景という背景を見る事は無かつたとアレッサは思い出した。

どうとなく懐かしさをが漂う風景に酔いしれないと列車は段々と減速。どうやらここは世界で一時停車するようだ。

しかしダイヤから貰つた“切符”があるからこの世界に降り立つ必要はない。

やがて列車は鉄骨だらけの建設現場のような場所へと停車した。鉄骨の合間から覗く陽光にうつとりとしている。

黒い羽を持つた鳥がすぐ横を飛び立つて行つた。

「アリス？」

思い出したその名前は短い余韻と共に夕焼けの彼方へと消え去つていた。

列車の蒸氣を吐き出す音と共に外の世界の音は一切遮断されて何も聞こえなくなつた。

近くにいたシンシアは訝しげにアレッサの顔を伺う。シンシアにはアリスの姿が見えていなかつたから当然の反応なのだろう。座席に置いたままだつた黒いポーチを握りしめると我を忘れて列車の出口へと走つて行つた。

「アレッサ、どこへ行くの？」

シンシアは慌ててアレッサの行動を抑制しようと座席から立ち上がりつた。アレッサもシンシアの方へ振り返つて苦悶の表情を浮かべる。

アリスがいるかもしれないなんて事を理解してくれるとは到底思えない。

だから下を俯いて握り拳を作ると、黙つてまた外を向いた。黄昏空の雲の合間から暖かい太陽の光が差し込んでアレッサの体を包み込んでいた。

そのまま走つて列車を降りた。後ろからシンシアが叫ぶ声が聞こえたがアレッサは聞こえていないフリをした。

黄昏の中に響くのは一人分の足音だけ。足元には水が張つてあって、歩くたびに世話をしない水音が響き渡る。

陽光が水に反射して世界が煌めいている。空から光の雫がひらひらと舞い落ちて、余計に明るく感じる。

アレッサは唐突にこの世界が元の世界に戻る時の、真っ白い空間に柱が等間隔に建てられていて、その奥の巨大な壁にポツカリと空いた大きな白い穴の場所を思い出した。

あの白い場所とここはどこか雰囲気が似ている。アレッサは走りながら辺りを見渡して思った。

白い場所に居たのはアレッサの他にアレッサと同じくらいの身長の少女。

アレッサに意味深な言葉を投げかけて元の世界に戻る事を拒もうとした。あれは一体何だという？

どこか懐かしい、他人とは思えない感覚。まるで自分の体の一部だったような

そこまで考えると一寸思考を停止した。田の前にそびえ立つそれに遭遇したからだ。

十三枚の分厚い巨大な透明の壁が、儀式のように円形に並べられていた。

十三枚の巨大な透明の壁の中心には、透明の螺旋状の階段があつた。

光を浴びて辛うじで、「そこに何かがある」と視覚化出来る。

果たしてこの階段を上つた先にアリスはいるのだろうか？　いやそもそも、あの時見たのは本当にアリスだったのだろうか？

果てのない疑心はアレッサの体を取り込もうとしている。

考えても始まらない。そう思ったアレッサは透明の階段の上にそつと足を置いた。

履き物を履いている筈なのに、階段に足を着けた瞬間にひんやりとしか感覚が足を襲う。足が着いた階段は七色に発光を始めて幻想的な雰囲気を漂わせていた。

次々と足を踏み出して階段を一步ずつ上つていく。

黄昏の光を浴びてアレッサの身は焦げんばかりに。

遙か高くまで上り詰めて、初めて世界を見回した。大きなオレンジ色の雲がアレッサのすぐ上にまで張り巡らされていて、相当な高さまで上つてしまつたのだと理解。

まるでその姿は、天国の階段を上る死者そのものだつたのだろう。

階段の最上部に達した時、アレッサはその光景に息を呑んだ。目の前に夕日が見える。突風に流される雲がアレッサを歓迎している。

美しい風景。どうやら最上部には透明の床が敷き詰められているらしく、歩いても問題無い。

風の音が強く、千切れた雲が矢のよつに吹き飛んで行つて視界をふさぎ込もうとする。

両腕を前に掲げて視界の確保に努めていると、夕日の奥で何かが羽ばたく姿が見えた。シルエットだったが、あの形は間違いなく力ラスだ。

黒の世界に入つてから、現実世界の動物に合つた事はアリスだけだった。つまり、あのシルエットもアリスの可能性が高い。

向かい風となつた突風に抗いながらアレッサは前進を進める。そうしないとアリスと思わしき影が消えてなくなつてしまいそうで怖かつたからだ。

しかし進めば進むほど、影は遠ざかつて行く。アレッサは泣き出しそうになつてしまつた。

「アリス！」

思わず口を開いたその時、視界は雲で何も見えなくなつた。

雲が完全に晴れて、田の前に何も障害が無くなつて初めてアレッサは目を開いた。

そしてアレッサは自分がいる場所を見て愕然とした。そこは以前アレッサが現実世界へ帰る為の真っ白い空間だつたからだ。

白い背景に白い大理石の床。床には僅かな水が張つてあつて、床から生えるように大きくて太い白い柱が左右に等間隔に建てられていた。

柱には松明が丁寧に付けられていて、その奥に巨大な壁。一つ違ひがあるとすれば、穴が僅かに小さくなつてゐるような気がする。

「また来たんだ。今度もまた元の世界に戻りに来たの？」

後ろから声を掛けられたので、とつさに振り返る。するとアレッサのすぐ後ろに声の主はいた。

アレッサと同じ顔、同じ服、同じ髪型でじつとアレッサを見つめている。

最初にここに来た時は遠すぎて声の主の姿をはつきりと見る事が出来なかつたが今なら分かる。これはアレッサそつくりの人物だつた。

ただ一つ違うのは左目に赤い亀裂が入つてゐる事。

赤い亀裂は左目を完全に塞いでいて、亀裂は自ら発光しているよう見えた。

こんなに目立つ傷なら最初にここに来た時も分かつた物だが。最近になって付いた傷なのだろう。

「あなたは帰る為に来たの？ 戻つても結果は同じだよ」見えている右目でアレッサを凝視する。それでもアレッサは退く事なく返事をした。

「アリスが、私のパートナーがいたの。それで追つて行つたらいつの間にかここに飛ばされて来ちゃって」

ワンピースの裾を強く握りしめる。アリスは今どこにいるのだろうか、そればかりを考えていた。

それを聞くと赤い亀裂を持つた少女は素つ気なく答えた。
「へえ、それじゃあ元の世界に戻りに来たんじゃないんだ。あなたは自分の世界を自分の理想と考えていいないのに自分の理想の一部を守りうとする」

少女の意味深な発言にアレッサは疑う表情を隠せない。一体この少女は何が言いたい？

「“理想”って何よ、アリスからも黒の世界は私が望んだ物と言われたし」

「黒の世界はあなたの“理想”。あるいは世界。あるいは永遠。あるいは神。あるいは一。あるいは無常。あるいは命。そしてあるいは現実」

少女はアレッサの眼前まで人差し指を突き出す。その顔は僅かに笑っているように見えた。

「ここはあなたの望んだ世界。あなた自身がそれを否定してもあなた自身がそれを肯定する。今までそれぞれの世界であなたは様々な物に触れ合ってきた。だけれどその殆どがあなたの都合の良いように解釈されたんじゃないの？」

振り返る。確かに水の冷たさも、糞尿の臭いも、太陽の暑さも、何も不快さは感じずにいた。それだけじゃない、それぞれの世界で拾った石は紛れもなくアレッサの理想だった。「あなたの言う黒の世界は全ての“真理”。同時に全ての“無”。完成された世界であり、純粹な世界」

未だにいまいち良くな分からぬが、今はそう解釈するしかないのだろうか。

果てのない不安が、謎が、溶解していくような心地がしていた。

「この黒の世界はアレッサの望んだ物だと。自分でそれを否定しても肯定してしまうとも。

アレッサはこの世界に迷い込んだ時からずっと「これはどうなのだろ」と考えを巡らせてきた。

そして段々と分かつてくる実体、実状。世界の地図のどこにも載つていらないアレッサだけの理想の世界。

「あなたの言う黒の世界が完成された世界ならば、あなたが元いた世界は不完全な世界。完全な世界はあなたの中にしかありえなく、他にはどこにも存在しない」

淡々と説明を続ける少女。この少女が言う事が全て真実ならば、黒の世界は完成された世界で、アレッサだけの観念の中の世界という事になるのだろうか。

しかしそれでもアレッサは納得がいかなかつた。もし仮にこの世界がアレッサの望んだ世界だつたとしたならば、どうしてアレッサの記憶や感情以外の物が世界に散りばめられている。

それぞれの世界には抽象的な対象で、アレッサが生理的に受け付けない出来事が存在していた。

「これが私の望んだ世界だといつならば、私が拒絶する出来事が起ころのはおかしいじやない。私は今までこの世界に何度も傷つけられてきた。訳の分からぬまま“目的地に行け”なんて言われて傷付いて。これのどこが私の望んだ世界だつて言うのよー！」

今まで堪えてきた鬱憤を晴らすようにアレッサは叫んだ。そして少女の肩を強く掴んで激しく揺さぶる。

少女はまるで蝶人形のように無表情のままなすがままにされて。

肩で荒い息をしながらアレッサは少女の肩から手を離した。

そうして紡がれる言葉の螺旋。

「それはあなたがこの世界の住人ではないからよ。あなたが元いた世界は不完全な存在の塊だつた。神も、生き物も、建物も。完成された存在に不完全な要素が僅かでも入り込むと、それだけで完全は不完全に変わる。あなたがあなた自身の世界を不完全にしているのよ。だから歪みが起る」

「つはあ！？ 一体何訳の分からぬ事を叫んだ時、足に違和感を感じた。

痛みとは少し違う。しかし、足を掴まれているような違和感。恐るおそる足元を見てみると、アレッサの足は分解されていた。

粒子状になつて、壁の穴へと吸い込まれて行く。

途端に恐怖した。アレッサは一度、黒の世界で“破滅”した経験があつたからだ。全身が火で炙られたような痛みにみるみるうちに醜くなつていく自分の体。もうあのような経験は二度としたくない。アレッサの前にいる少女は笑つた。左目の部分の赤い亀裂だけが妙に強調されているようで。

「どうやら時間切れみたい。あなたはもうここにはいられなくなつたけれど、元の世界に戻るつもりは無いのでしょうか？　ならあなたの言つ黒の世界に戻るしかないわね」

足の部分から分解されていくアレッサの体は既に腰の辺りまで届いていた。

せつかく解きかかつたこの世界の謎が、また曖昧になる。

「待つて、まだ話は終わっていない！」

手を伸ばすも、今度は指先が分解される。焦りがじわじわとにじみ出でた。

雲が晴れて黄昏の空が見えた。アレッサは何かを掴むよつた姿勢で手を伸ばしている。

白い空間で起こった出来事が一気に頭の中で叩き込まれたようだ、アレッサは頭痛を起こしていた。

不快な汗で全身を濡らしながら、ここがさつきまでいた白い空間ではない事を取りあえず理解。

様々な考えが交差する。黒の世界と白の世界、黒の世界は完成された世界で、黒の世界に迷い込んだアレッサは不完全な存在だと言った。

完全な物に僅かでも不完全な物が混じれば、それ自体が不完全になってしまつとも。

一体どういう事なのだろうか？ アレッサは考える。

黒の世界がアレッサの完成された理想の觀念的な世界だとすれば、アレッサ自身は招かれざる“陰”だという事なのだろうか？

深まつて行く謎、しかし確実にその深層へは近付いていた。

その時、遠くで懐かしい声。アレッサは何度もその声を期待していた。

「アレッサ？」

空の上でキョトンとした口調で尋ねるのは、アリストだった。

喉元まで声が出かかったのを堪えた。

代わりにアレッサはアリスに近づく。目の前にいる黒い翼を持つ、人の言葉を理解するカラスは紛れもなく、今までアレッサと共に旅をしてきたアリスだつた。

“樹海の世界”での破滅で、どうやって抜け出してきたのかは分からぬが。

しかしその姿は以前とはどこか違う。何かが欠けたというか。

その正体は近付く度にはつきりしていく。アリスの左目に、赤い亀裂が走っていた。

アレッサはその姿を見てギョッとした。なぜなら真っ白い空間で出会った少女の左目にもアリスと全く同じ赤い亀裂が走っていたからだ。

アリスがあの少女と何か関係があるのだろうか。それとも、アレッサは頭を振つてその発想を打ち消した。まさかアリスが何か関係があるとは到底思えない。

本来ならばパートナーとの再会の余韻に浸りたいが、そもそも言つていられない。ここが列車の外と言う以上、破滅は常に迫つている。アレッサは元来た道を戻り始めた。

段々と日は沈み、蜜柑色だった世界は赤く変色を始めた。陽光に照らされて引き伸ばされたアレッサ達の影はどことなく哀愁が漂っている。

アレッサは先程から覚束ない足取りで透明の螺旋階段を降りている。“樹海の世界”でアリスと別れた時の言葉を思い出していたからだ。

二人を遮っていた檻を見て「これは君と僕の距離だ。とても近いけれど、絶対に交われない」と言つた。おそらくそれは言葉通りの物を指しているのではなく、もつと抽象的な。

そう言えば、アリスと一度別れた時にこの黒の世界は「僕の黒の世界でもある」と言つていた。アレッサの観念だけに存在する世界なのかなと思っていたが、誰かとそれを共有出来ているのだろうか。

真っ白い空間で出会った少女はまるで双子のようにアレッサそつくりであった。そしてアリスはその少女と同じ場所に同じ傷を負っている。

アリスがあの少女と同一人物だと言つたのだろうか。いや、アリスはカラスだ。人にはなれない。

再び列車の近くまで到着した。日はすっかり沈み、薄い暗闇だけが辺りを支配している。

歩く度に響き渡る鉄の音。鉄骨の隙間に潜む暗闇がアレッサは何か怖く感じた。

「本当にアレッサなんだよね？」

アリスはアレッサのすぐ後ろを飛んで付いてきていた。アリスの質問にアレッサは振り返る。

「そうだよ、あなたの知っている私。ずっとあなたと会いたかった手を伸ばす。今度はアリスを手離さないよ！」

「僕と君には絶対に手の届かない距離があった。僕はそれを分かっていて破滅に呑まれた。そうすれば君は完全な“本物”になるから」「え、どういう事？」

「でもどういう訳か僕は破滅せずにいる。また君と近づいて、君と旅を続けようとしている」

アリスの紡いだ完全な“本物”。ならばアリスがいたならばアレッサは完全な“本物”になれないのだろうか。いや、そもそも“本物”とはどういう意味なのか。

「でも、君がそれを望んだ結果ならば僕にそれに従おう

列車に乗り込んだアレッサ達は指定の座席へと着き、発車と共に流れて行く外の世界を見つめていた。

列車に揺られながらアレッサはある事を考える。それは先程の世界でアリスが紡いだ言葉。

「君がそれを望んだ結果ならば、僕もそれに従おう」あれは果たしてどういう意味だったのか。

隣の席で大人しくしているアリスの姿を見た。左目に刻まれた赤い亀裂、それ以外は前と何も変わらない。再び出会えて喜ぶべき筈なのに、それを喜べないアレッサ自身がいた。

アリスの放った言葉を何度も吟味しても真意は分からぬ。結局アリスは何を言いたかったのか、果ての無い疑問が螺旋状に渦巻くばかりだ。

「アレッサ、さつきは急にどうしたの？」

突然声を掛けられる。振り返る先にはシンシアがいた。アレッサはさつき、アリスを追う事に夢中で、シンシアの言葉を聞いていたかった。

気まずい表情を浮かべながら、適当な事を言ってみる。しかしどうにも上手くいかなかつたようだ。

「あなたが話したくないのならそれでいい」

諦めたようにシンシアは言及を止めた。その時の態度がまるで母親のリサと同じだったので、アレッサは背徳感に蝕まれた。

アレッサは何も言う事なく、自分の座席に戻ると顔を俯かせた。

「アレッサ、僕がいない間に何があつたのかい？」

突然アリスが話しかけてくる。アレッサには色々な事が起こり過ぎていて、何から話していいか分からずについた。

その表情を汲み取ってくれたのか、アリスは口を開く事はなく、静かに外の真っ黒の背景だけを見つめていた。

列車に揺られ、しばらくするとアレッサの瞳は虚ろになってきた。まともに思考が出来ない。アレッサは今まで黒の世界でこのようないきなり出来事に遭つた事がなかつたのでひどく驚いていた。

次第に迫つてくる眠気。微睡みの中でアリスが心配そうにアレッサを見つめている。

「どうしたの？」

アリスも黒の世界では疲労が無い事を知つてるのでその行動を不審に思つたのだろう。

黒の世界では疲労を感じる事はない。アレッサ自身が経験してきた事だ。

どんなに走り回っても、どんなに精神的に追い詰められようとも、疲労によって倒れる事は有り得ない。

その筈なのに、アレッサは今急激に疲れを感じ始めていた。今まで旅してきた世界の疲労が、重くのしかかる。

おもむろにポーチから石を取り出す。“管の世界”で拾った、気持ちを落ち着かせる不思議な石を強く握った。

アリスはこの石をアレッサの願いの石と呼んでいる。それはこの黒の世界その物がアレッサの理想だから成り立つ物なのだろうか。理想の世界とは言つものの、理不尽な事象が多すぎるのも事実。それはアレッサが黒の世界以外からやつてきた不完全な存在だから、と無理矢理解釈するしかない。

そもそもアレッサの目的地とは一体どこなのか、どうしてアリスはこんなにもアレッサに執着するのか。

何よりも、白い空間で出会った少女の傷とアリスの傷が一致している事に疑問が深まる。

やがて何も考えられなくなる。ただ全身が微睡みに支配されて、自由を奪われた感覚。

周りの声も、映像もいつの間にか遮断されて、アレッサは深い眠りに落ちていた。

血液が流動する音と心の中に反響する心臓の鼓動に目を覚ました。

アレッサはどことも分からぬ場所に横たわっていたのだった。それはおそらくアレッサが見ていく夢なのだろうが、どうにもこの場所はどこか見覚えがある。

「ここは、あの時の」

迷宮。“森の世界”でアレッサは一度地面の中に引き込まれてしまつた。その時に辿り着いてしまつたのがこの迷宮だつた。

あの時は時間切れでアレッサは確かに破滅した筈なのに、訳の分からぬ白い空間に飛ばされていた。

そして今居るこの迷宮も以前の迷宮とよく似ている。床のタイルの色や構造は違うが、この押し潰されそつた程に焦燥感に駆られる雰囲気は紛れもなくあの迷宮だ。

アレッサは自分が一度破滅したであろう事をビックリしても思い出してしまつ。

言葉を発しても周りに何も変化が起きない。それはアレッサ自身が見ている夢だからなのか、それとも黒の世界とはまた別の場所だからなのか。

辺りを見回してみるがアリスはどこにもおらず、眼前には人一人が通れる程度の細長い回廊が迫っている。

ポケットから懐中時計を取り出して時間を見てみるも、秒針はまつたく動く気配が見えない。ここでは時間経過が起きていない、つまりこれはアレッサの夢の中だけで起きている出来事なのだ。

そつと一步。硬いタイルに足を乗せる。

カツンと硬い音が辺りに反響をするがあつという間に周りの音にかき消されてしまう。

何かの生物の体内に紛れこんだような不快感は相変わらず拭えない。アレッサは気持ちを落ち着かせる為に“管の世界”で拾った石を握り締めていた。

細い回廊を通り過ぎると、今度は両側の壁は無くなり黒い背景だけが覗く場所へと出た。

道の幅は相変わらずそのままだが、両側に何も無いだけで不安は増大する。

壁が無くなり、黒い背景を田を凝らしてよく見てみると赤い外灯やら、大木が伸びているのが見えた。

この背景だと思っていた黒、これもよく見たら水のような物で、外灯などはそれから顔を出すように突き出しているだけだった。

勿論その水に触れようなどとはアレッサも考えない。まだ道が続いている回廊を突き進むだけだ。

道を進むごとに黒の水から浮かび上がってくる物が増えてくる。それは車だつたり、柱だつたり、鉄塔だつたり。

その殆どが捻れたり、ひしゃげたりを繰り返していて使い物にはならないだろう。

まるで「ミニ処理場みたいだ。

“樹海の世界”でもこれと似たような光景は田にしたが、今回はあれの比じやない。

やがて細い回廊にも終点がくると、出口と思わしき場所には何重にも有刺鉄線が張り巡らされていた。それがまるで見せては不味いような物に思える。

しかし他に道は無い。元来た道を戻る訳にもいかない。
アレッサは意を決して鉄線を潜る事を決めた。

今度は“樹海の世界”で手に入れた石を握り締める。次の瞬間、手には大きめのシャベルが納まっている。

「この鉄線、相当錆び付いているからもしかしたら衝撃で壊せるかも」

そう呟いたアレッサは真っ先にシャベルの先を鉄線に向けて思い切り突き立てた。

金属が勢い良く切れる音と共に案の定鉄線は千切れた。その行為を数回繰り返すだけで鉄線は全て切断され、道の奥へと進む事が出来るようになつた。

しかし鉄線を切る作業の途中で怪我でもしたのか、アレッサの左腕には僅かな切り傷が生まれていた。

気にする程の怪我ではない。そう思いながら先に進もうとした瞬間に、左腕に刺すような痛みが走る。

アレッサは恐るおそる自分の左腕を見てみると、なんと怪我した傷口から有刺鉄線が何本を生えていたのだ。

ぞつとして鉄線を払いのけようとするが、叶わない。

鉄線はアレッサの左腕の肉から生えているらしく、鉄線の本数がどんどんと増えていき、傷口が広がつていた。

アレッサは走り出した。その姿はあるで自身の腕から生えている有刺鉄線から逃げるようだ。

心拍数がどんどん上昇していくのがアレッサ自身が一番理解していた。以前ここによく似た迷宮で同じような事態に遭遇したから。身体が壊れしていく恐怖をアレッサは誰よりも理解していた。全身が火に炙られたように熱くなり、身体の中が一気にはぜる痛み。

醜くなつていく自分はこれ以上見たくなかった。

しばらく走り続けていると、墓地のような場所へと飛び出した。墓地と言つてもタイルの床に不格好な石が置いてあるだけだ。それ以外は何もない。

墓地の周りを囲むように等間隔に電柱が立てられていて、電線も張られている。「行き止まり？」

半ば狂乱しながら辺りをグルグルと見回すアレッサ。しかしどうにもここまで一本道のようで、ここが終点のようにしか思えない。アレッサは左腕を恐る恐る見た。鉄線は左腕全てに巻きついて、今にも腕を切断してしまいそうだった。

考える。この左腕に巻き付いている鉄線をどうにかできないものだろうかと。

アレッサは最初はこの世界にもきっと終点や、最深部のような物があつて、そこに行き着けば左腕もどうにかなるものだとばかり思つていた。

しかし田の前に広がる墓地のような空間を見る限り、どうにもここが終点だとしか思えない。確かにここに行き着くまでに道は分かれていたが、結局は全てここに辿り着いてしまつたのではないのだろうか。

ならばこの墓地には果たして何の意味があるのだろうか。

ギチギチと締め付ける鉄線は肉に食い込み、赤い液体を流してい る。痛みのあまりにアレッサは深く考える事が出来なかつた。

しかしこのまま左腕がもげるのを待つ訳にはいかない。

矛盾と葛藤。アレッサは墓石の下に何があるのではないのだろうかと考え再び歩みを始める。

広大な空間に墓石と思えるそれは何百と存在する。

アレッサは焦つていた。また自分が自分でなくなり醜い姿になりたくない。

アレッサは墓石を倒した。最早焦燥に駆られたその心に背徳感や罪悪感は全く無く、ただ自分が生き延びる事に必死になつていて。

僅かな力で墓石は倒れ、倒れた墓石は衝撃で砕けて時間と共に砂になつて消えていく。そんな行為の繰り返し。

アレッサに墓荒らしという言葉は無く、それは当然の行為として正当化すらされていた。

はたして一体何体の石を倒して壊してきたのだろう。十体かも百体かもしれない。

時間が経つと共にアレッサの左腕は血に染まつていく。
そして滴る血が地面に血溜まりを作る時、アレッサは動けなくなつていた。痛みのあまりその場にうずくまる。

おそらく左腕の骨は滅茶苦茶に折れているだろう。異常な方向にひしゃげていて、それでも鉄線は締め付けるのを止めない。

視界がグラグラと揺らぎながら、最後の力を振り絞つて田の前の墓石を倒す。

土煙と共に姿を現したのは、正方形の黒い穴だった。
探し当てると身体を引きずり、穴に落ちるのだった。

暗闇の穴の中を重力の法則に従つて落下を繰り返す。

しかし落ちている穴の形状は筒状らしく、アレッサの身体は滑りながら落ちて行つた。

左腕の痛みは引く事はなく、痛みは重なり続けている。意識が朦朧とする中でアレッサが見た物は真つ暗な道だけ。

滑り、転げ落ち、落下。背中から硬い地面に叩きつけられて肺胞が死滅した感覚した。

肺の中に電撃が走る。かつと胸が熱くなり、咳ばかりで呼吸がまつたくできない。

叩きつけられた衝撃で口から血を吐くと、アレッサは霞む視界を必死に見回していた。

蒸せ返す空氣に肥溜めの臭い。湿氣と臭氣と硝煙が立ち上つていた。

覗いた視界の先にはどうやら牢獄のようになつていて、アレッサを囲むように鉄の太い棒が立ちはだかっている。

牢の先には大松に灯りが灯されていて、僅かな光に薄暗く影が出来上がつていた。

もはやアレッサは限界を迎えていた。左腕の傷ばかりだけでなく、ここに落ちた衝撃で呼吸がまともに出来ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1208s/>

サイケデリックシンドローム

2011年9月27日03時16分発行